

奴隸兵の帰還

メヴィ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネイバーに拉致され、12年間奴隸兵として使われた女主人公が突然故郷に帰つてき
た話です。

ネイバーに捕獲とかされた人たちってどうなるのかなあつて思つて思いつきで書き
ました

目

次

奴隸の少女	白夢白堊の過去	白堊と玉狹	主人公説明だよ	白堊の実力	ボーダー入隊	嵐山	イレギュラーゲート	繫がり	ダイメイオモイツカナイナリ	ナツクル型トリガー	修の覚悟
-------	---------	-------	---------	-------	--------	----	-----------	-----	---------------	-----------	------

135 124 109 100 90 77 58 41 36 15 11 1

音	みたされて	遅れてすいません……	特訓
第17話	第18話	第19話	20話
にじゅういちわ	にじゅうにわ	にじゅういちわ	にじゅういちわ
218	211	206	201

191 187 171 159 152 140

奴隸の少女

突然の爆音で目を覚まし、警報が鳴り響く。ついさっきまでボクを使っていた隣で寝ていた男は体を勢いよく飛び起こし、ボクの裸体がさらされる。

「な、なんだ！ 敵襲か！！ おい！！ 白壺しろつぼさつさと行け！」

鉄の首輪を捕まれドアへ引きずられる

「了解しました」

部屋から放り出されたボクは自分の持ち場へ戻り、服とは言えないボロ切れを身に纏い、トリガーを持ち出撃する。そこではもう他の同僚どうりょうが戦っていた。

「モールモッド、イルガーラー、あれは……特化型ラービットか」

地上ではモールモッドが国民やトリオン兵を細切れにし、空からイルガーラーが爆撃をし、ラービットが軍の基地を破壊しながら軍人を捕獲している。本格的にこの国を終わらせに来ているのか。

「おいお前！ さつさとお国の為に戦え！ 貴様らのようなのが役にたてるのだ！ 我々を

守つて死ね!!!

「了解いたしました」

この国はもう持たないだろう。あの特化型ラービットがいるのは軍の内部から情報が漏れていたからだろう。でなければコストが高いラービットは使わないはずだ。

「負け戦……か」

負け戦ならば逃げても誰も攻めないだろう。まあ逃げればの話しじゃあるが、ボクがつけてる首輪は奴隸が逃げないように奴隸の情報を発信しているのだ。もし逃げたことがバレれば首輪は爆発し、殺される。ならばボクがやることは死ぬまで戦うことだ。ボクは奴隸だ。国に使い潰され、利用され、死んでいく。戦えなくなつた奴隸は新型トリオン兵の実験材料にされ、慰み物にされる。まあボクも慰み物にされているが、まだ戦えるから殺されていられない

ーああ、死ぬ場所が戦場というだけ幸せだー

ーいつの日か見た故郷はどんなところだつたかー

ー体を弄られたときに記憶も弄られたのかー

ー何も思い出せないー

空と大地を埋め尽くす敵を前にいつものように声を出す

「トリガー 起動^{オーブン}」

『ゲート開きます。交戦に備えてください』

「了解、ありがと杏」

ゲートの出現を知らせてくれた川杏に返事をしながらトリガーを起動させる
「真依、双葉、やるわよ」

「了解！」

隊員の二人に声をかけ、ゲートの発生に備える。

真依がトラップを仕掛け、双葉がトリガーを構える。A級6位という実力をもつ私た
ちの連携は回りからも評価を受けるほどだ。

そしてゲートが発生し、トリオン兵が姿を表すが
「ど、どういうこと？」

「全部死んでますかね？」

「油断しないで！まだ来るわ！」

ゲートから出てきたのはトリオン兵達の残骸だつた。ただ死んでいるのではなく、切
られていたり、貫かれていたり、内部から爆発したようなものまであつた。明らかな異
常事態に私は杏に通信をする。

「杏、聞こえる？」

『はい！聞こえます！』

「ネイバーが全部死んでるわ。そつちに他に何か情報はある？」

『ぜ、全部ですか？私のほうには何も情報はありません！一度ゲートから距離をとつ
てください！』

「わかつたわ、真依！双葉！一旦引くわよ！」

オペレーターの杏の指示に従い、ゲートから距離を取ろうとすると杏から通信が入つ
た

『二つ目のゲートを確認！後方20メートル付近です！警戒してください！』

「ツ！了解！」

二つ目のゲート？こんな近くにゲートが開くなんて、まさかこのネイバー達と関係が
？だとしたらまずい……あの量のネイバーを倒せるなら私たちも危ない……

「加古さん！何かきます！」

「二つ目のゲートから出てきたのは……」

「え？こ、子供!?」

「ええ!?」

ゲートから出てきたのはバムスターの上に乗った子供だつた。子供はバムスターの上でふらついたあと、バムスターから落ちていった

「!!双葉!!」

「韋駄天!!」

双葉が最速のトリガー 韋駄天を発動させ子供を地面とぶつかる前に受け止める。

「!? 加古さん！この子重症です！救援を!!」

「な!?」

『ひつ!?』

私が双葉に追いつき、双葉が抱いている子供を見る。

アルビノのように白く太ももで伸びた髪と肌と服とは言えないボロ切れを大量の血が汚しており、明らかに死にかけている。

とくに酷いのが肩からお腹へかけての大きい切り傷だ。

こんな女の子が何故、こんな大ケガをしているの!!

「うッ……が、ごぼお！」

女の子の口から血が溢れ出す。もう、いつ死んでもおかしくはない
「トリガーオフ！」

「加古さん!?」

私はトリガーを解除し、上着を脱ぎ腹部を止血し、再びトリガーを起動する。

「杏！本部に連絡を！双葉！そのままその子を病院へ！」

『了解！』

「何で……なんでゲートから女の子が!!」

ふいに目が覚め無意識にボクのトリガーを探し始め、腕を動かすが

「うつ!?

腕に激痛が走りうめき声あげる。今の激痛がで意識が覚醒し、状況を確認しようと首を回す

「……は……どこ？」

ボクはベッドに寝かされ、どういうことか治療が施されていた。何故ボクは治療をされた?……まず、ここはどこ? そう思いボクは記憶を思い出していくと、使われたあと

：国が攻められて：黒角を倒して……最後に思い出せるのはトリオン兵の残骸とボクを囲むトリオン兵だつた。

捕虜にされたの？でも妙だ。治療が施され、拘束もされていない、それどころか両腕に埋め込まれたトリガースラ奪われていない。オマケに監視もない、どういうこと？

そう考えているとドアらしい場所がガラツと開かれ、女性が三人入ってきた。

「あ～!!起きてる!!」

「やつと目が覚めたようね」

「……ボクをどうするつもり？」

「「「は？」」」

「急遽集まつて貰い、感謝する。皆もわかっていると思うが、2ヶ月前に保護した近界人（ネイバー）と思われる少女が目を覚ました」

「な、なんだと!?」

忍田が目を覚ましたことをつげると集まつていた上層部はざわついた。

「映像出してくれ」

忍田がそういうと会議室の中央にホログラム式の映像が写し出される。そこには件の少女と加古隊の4人が写っていた。加古隊は少女の第一発見者として監視をする指令を下していた。先程彼女達が様子を見にいつた際に目を覚ましたと報告があり、上層部を緊急招集し、会議を開いたのだ

『えっと、君の名前は?』

『名前? 名前とは何?』

『え、えっと……他の人から呼ばれる……』

『なるほど……識別……ならボクはLK-021、21号、肉壺、白壺と言われていた。どれを名前として名乗れば良い?』

『え? エ? どういうこと?』

映像を見ていた上層部は忍田を含め、全員が驚愕する。

「…………忍田本部長、肉壺とは……そのままの意味ですか!?」

「…………ああ……彼女を治療する際、彼女からは不明の精液が検出された。それに、彼女は意図的に子宮を摘出された手術痕があつたそうだ」

「ツ! な、なんてことを……!! こんな小さな子供に……そんな……」

肉壺とは、女性器を表す言葉である。

沢村はその言葉を聞き、怒りを覚え、涙を流していた。意図的に子宮を摘出され、精液が検出されたということとは、性処理をさせられていたということだからだ。

『し、白壺つてどういうこと?』

『ああ、それはボクを使っていた男がボクの髪が白からだと言つていた』

『そ、そんな……』

『なぜ貴女が泣く?』

『だつて!こんなの……』

会議室には沢村の泣く声と映像だけが流れていた。そんな中、鬼怒田が口を開いた。

「…………本部長、彼女は、ネイバー、なのですか?」

「彼女のDNAを検査した結果、彼女は12年前に失踪していた、日本人だ」

その言葉を聞き、鬼怒田は机に拳を叩きつけ怒号をあげた。

「ふざけるなネイバー共がっ!!」

鬼怒田には15の娘がいる。そんな自分の娘よりも幼く見える少女が体を弄くり回され、更に慰み物にされていた事実に鬼怒田は憤慨していた。

「あんなにも小さいあの少女!なぜ!そんなことができる!」

鬼怒田が叫んでいると林藤が声をあげた

「落ちついてくださいよ、鬼怒田さん。腸煮えくり返つてるのはあんただけじやねえんだ」

「しかしッ！」

「落ちつけ」

「!!」

「すまねえ、俺だつてキレてんだ。だが、今は本部長の話を聞くのが先だ。続けてくれ」

「……ああ」

鬼怒田を軽くにらみ、落ち着かせ、忍田に少女の情報を求める。そして忍田は口を開いた

「彼女の名前は白夢白堊しらゆめはくあ 17歳で」

皮肉にも 白壺 という名前が文字だけ合つてしまっていた
「12年前失踪した小南桐絵の親戚だ」

白夢白堊の過去

——林藤 side ——

「彼女は白夢白堊」

「小南桐絵の親戚だ」

「医師によると、脳の記憶組織の一部が切り取られているらしい」

忍田が言つた衝撃の事実に俺は驚きを隠せないでいた。

「おい忍田……確かなのか…………？」

俺は信じられず、忍田に確認をしながら映像を見直す。

『ごめんなさい…………辛いことを聞いてしまつて…………』

『別に辛いことをではないさ、ボクは奴隸だから殺され無かつただけ幸せだろう』

『そんな…………』

『それよりも、ボクこの後どうなる？ 実験台か？ 奴隸兵か？ 捕虜か？』

『…………どうも、しないわ、貴女は怪我が治るまではここに居て貰うわ、ただ、一つだけ、一つだけ信じてほしいの、私たちは貴女に悪いことは絶対にしないわ』

『ふむ……結果的には捕虜か…………だが、なぜボクからトリガーを奪わなかつた？』

『ふむ……結果的には捕虜か…………だが、なぜボクからトリガーを奪わなかつた？』

『え？』

『ボクは奴隸トリガー兵だ。トリガーだつて持つている』

白堊はそういうながら自身の腕を指で撫でると、撫でた場所は裂けていきトリガーを取り出した。両腕から

その光景を見た鬼怒田は驚愕の声をあげた。それもそのはずだ、体にトリガーを埋め込むと言うのは体内のトリオン器官を改造し、トリオン器官とトリガーを繋げるということだ。それは命に関わる大手術であり、非人道的な手術である。

『ボクを捕虜にするというならこのトリガーは預けよう。ボクは君たちと敵対する理由はない。どうせ、あの国も滅んだだろうからね』

淡々と言葉を伝える白堊に林藤は自分の知る白夢白堊の記憶を思い出していた。

「ねーねー！りんどう！あたしの友達よ！はくあつていうの！」

「ま、まつてよきりちゃん！」

記憶の中ではまだ幼い桐絵が白堊を引っ張つて来ながら笑顔で俺に紹介していた。つれてこられた白堊は困つたようにしながらもにこにこと、笑つていたのだ。だが、だからこそ、今映像に映つている無表情の少女が白堊だということを、信じられないでいた。

「くつそ……何でだよ……小南桐絵に……何て言えば良いんだよ！」

「林藤……」

12年前、白堊が失踪したあの日から小南は親友とも言える白堊を失い、小南は泣きながら探していた。白堊の両親も必死に捜索したが見つからず、結果は死亡と判断され捜索を打ち切られた。白堺の両親は4年前の侵略で命を落とした。その最後を看取つたのは林藤だつた。二人はずつと白堺の名前を呼び、ずっと謝罪の言葉を言い、涙を流しながら死んだ。

「神様…………白堊が何をしたっていうんだよ…………」

林藤は血が滲む程に拳を握り、涙を流しながらそう呟いた。

病室から出た私たち加古隊は何言葉を交わすことなく、ボーダーへ戻つた。ボーダーへ戻ると、オペレーターの杏を含めて4人で呼び出された。
「あの子…………のことよね…………」

呼び出された私達は会議室へむかい、そこでは上層部のメンバーの空気ははつきり言つて最悪だつた。鬼怒田や沢村、林藤は怒りを露にし、今にも破裂しそうだつた。

「加古隊、戻りました」

私が挨拶をし、隊員もそれぞれ挨拶をしながら会議室へ入つた。そこで忍田本部長からあの子についての説明を受けた。その説明は私達を更に絶望させた。

——あの子は12年前失踪した日本人——

——名前は白夢白堊——

——体を弄くり回され、子供を作ることができない——

——体のあらゆるところを改造されている——

——小南桐絵の親友だつた——

——^日_本ちら側の記憶は消されている——

「このことは他言無用だ」

「りょう…かい…しました」

——ああ、なぜ、なぜ……こんなにも残酷なの……——

白堊と玉狹

ボクが玄界、日本に来てから1ヶ月ほど経つんだろうか、相変わらず監視は付かなかつたし、拘束もされなかつた。もともと体を改造されて治癒能力は高かつたが、治療の効果もあり既に怪我は完全に塞がつていた。

あとから聞いた話だが、ボクはここに来てから2ヶ月ほど眠り続けていたらしい。つまり、ボクの傷は3ヶ月かけて治癒されたことになるが、それでも最初の有り様を聞いた話によるとかなり早い速度らしい。みで：日本の治療はあまり優秀ではないのかかもしれない。あの国ならば寝ていた2ヶ月で治し、たたき起こしていただろうに。

「あら、起きていたのね」

そんなことを考えているとボクの主治医だという女性が入ってきた。彼女は所謂善人なのだろう。奴隸であるボクに嫌な顔もせずに世話を焼いてくれるのだ。

「ああ、もう傷は完治している。いつでも前線に出れるだろう」

「もう……貴女は……戦うことしか考えていないの？」

「当たり前だろう？ ボクは奴隸で、戦うことしか出来ないし、知らない」

「そう……だつたわね……ごめんね」

「気にするな」

何故かここの人間はボクが戦うことを示すと悲しそうな表情をする。何故だ？ 聞いたところによると、日本も他のネイバーに攻められていて、戦争中の筈だ。ならば、手駒が増えるのは良いことだと言うのに、それに、一命を救ってくれた恩もある。どうせあの国も滅んでいることだから、日本の為に戦うことも悪くない。

「よう、起きてるか？」

「リンドウか、起きてる」

リンドウ、ネイバーと戦うボーダーの支部長らしい。ここ最近はよくボクのところを訪ねてくる。最初リンドウが訪ねて来たときにはボクを使いに来たのかと思い、「ボクを使うか？」と言つたら何故か怒りの表情を浮かべた後に

「俺はお前にそんなことはしないし、だれにもさせない絶対にな」

と言つてきた。男なのに変わり者だな。最近は良く日本のこと教えに来ている。どうやら日本では奴隸はいないらしい。最初それを聞いたときには「は？」と、声に出してしまってほど驚いた。奴隸は使い勝手の良い戦力なのに何故いないのか訪ねるリンドウ曰く

「そこまで切羽詰まってるつてわけじゃねえし、そんな非人道的な事はしない。今までも、これからも」

のことだ。つくづく日本は変わった国だ。と、考え過ぎてしまつた。今日はどんなことを話に来たのかな？

「リンドウ、今日は？」

「ああ、今日はお前の今後について話にきた」

「ふむ、そうか」

「今後について……か、奴隸はないと言つていたし、ボクはどうなるのかな？リンドウ曰くボーダーという組織に入れば戦うことは出来るらしいが、一般兵と同じ扱いになるらしい。

「まず、お前の身元は判明している。お前は元々日本人だ」

「日本人……ということはここで生まれたということ？」

「ああ、そしてお前の名前は白夢白聖だ」

「しらゆめはくあ？」

「なんと、……がボクの故郷だつたのか、それにしても しらゆめはくあ？ か、不思議な名前だ。

「ああこれからはそう名乗ると良いさ」

「了解した」

「しらゆめはくあ？……今まで LK—021 と名乗つていたから違和感があるが、

まあ慣れるだろう。

「それでだな、お前はこれからどうしたい?」

「どうしたい、とは? ボクに決定権があるのか?」

「当たり前だ。これからはお前の自由に生きていい」

自由にか、簡単に言つてくれるな。ボクには戦うことしか出来ないのだから、決まつてているだろう。

「なら、ボクをボーダーに入ってくれ。これでも12年生き延びて来たのだから、戦力にはなるさ。それに、治療して貰つた恩もある」

「そう……か……わかつた。それがお前の意思なら、それを尊重しよう。そこで、だ。俺のところに来ないか?」

「リンドウの所……リンドウの部隊に入れると言うことか?」

「ああ、玉狹って所だな。まあ正式な入隊はまだ先になるが、俺の所の所属になれば、お前のトリガーも返してやれるからな。どうだ?」

ボクのトリガーが返して貰えるのか、あれはボクが自分で改造したものだから、わりと愛着も沸いているし、良いかもね。

「トリガーが帰つてくるのなら尚更だな。LK-021、たまこまに入隊する」「LKじゃねえ、白夢白堊だ。これからはそれがお前の名前だと言つただろ?」

「……了解」

慣れないな

そして病棟から出たボクは車という乗り物でリンドウと玉狹へ向かっていた。

「なあハク」

「ハク？ 吐くのか？」

「ちげえよ。お前の名前だ。はくあだから、略してハクだ」

「なるほど、日本は面白いことを考えるな」

「…………ハク…………お前は元々ここで暮らしていたんだ。お前の両親はもう、死んじ
まって居ねえけどよ、お前の両親とは知り合いだつたんだ」

ボクが名前に関して納得していると、唐突にリンドウはボクの両親について語り始め
た。

「どうか、それは残念だ。だが、ボクにはここにいた頃の記憶は無いんだ。国が使いや
すいように調整する際に消去したのだろうね」

「……………そうか……………」

そしてリンドウはしばらく黙ってしまった。何か気にさわることを言つてしまつたのかと考えていると、再びリンドウは口を開いた。

「…………お前には、友達が、いたんだ」

「?…………ともだち…………とは何?」

「親しい人、共に過ごす人、と言つたところだな。とにかく、ここにいた頃のハクにはいたんだよ。友達が」

「…………なるほど、同僚、のようなものか、それで、その友達がどうかしたのか?」

ボクがリンドウへ友達のことをといかけると、リンドウは車を止め、真剣な表情でボクと向き合い、話を始めた。

「お前の友達の名前は 小南桐絵こなんきりえ つていうんだ。お前と同じ、17だ。小南は今、

ボーダーに居る。そして、玉狹に居るんだ」

「そうか…………こなみきりえ……よし、覚えた。玉狹にいるということは同じ部隊になるのか?」

何故いま小南の事を言うのかはよくわからないけど、同じ部隊になるのなら名前は覚えておくことにしてよう。

「いや、いづれは同じ部隊へと考えているが、それはまだ先だ。それはともかく、ここ

からが大事な話だ。小南は昔のお前を知っている。だが、お前には昔の記憶は無いだろ
？俺の独断だが、お前のことはもう小南に話してあるんだ」

全部な、と付け加えながら説明するリンドウ

なるほど、ボクは知らないが、小南は知っているということか、それも、LK—02
1ではなく、白夢白堊を、か

「なるほど、つまりボクは白夢白堊を演じれば良いと言うこと？」

「いや、それはする必要はない。小南にはすべて話している。お前体のこと、記憶の
こともな」

「そうか」

ならボクは何をすれば良いんだ？小南に関わりを持つなと言うこと？

「小南は、お前を受け入れてくれると言つてくれた」

「？それはどういう…」

「詳しく言えば、LK—021であるお前を受け入れるつてこつた」

なるほど、白夢白堊としてではなく、白夢白堊という名前のLK^{ボク}—021を受け入れ
てくれるということか。

「でもやつぱりあいつも思うことがあるんだろうな。俺が全部伝えたあと、部屋で一
晩中泣いてたらしい。でも小南はな、

「記憶が無いなら新しく作れば良いのよ!!」

つてよ、だからお前にはしつこくしちまうかもしけねえが、そこは目を瞑つてやつてくれ

国ではありえないことだつたな。

「ああ、わかつた。ボクも小南とは良好な関係を築きたいからね」

「……ありがとう」

そして、リンドウは再び玉狹へと車を走らせた。

お互に喋らずに車に揺られながら、ボクはその景色を眺めていた。

コンクリート多いなあ……どこもかしこもコンクリートで固められて、地面が見えない……でも、コンクリートの上でも植物がある。日本の植物は強いね……最近、自分の口調が定まらなくなつてきてる気がする。皆の雰囲気に当てられたかな?まあ、どうでもいいね。

ん? なんでわざわざ川の上に建物が? 回りをイルガードが爆撃でもしたら陸に戻れなくなると言うのに、

「ハク、見えてきたぞ。あれが玉砕支部だ」

「あれば……川の家が玉砕か……」

「何故、川の上に?」

「さあなあ……おしゃれだから? ガハハハハ!」

「…おしゃれ、とは何?」

「え? うくんと……綺麗? うくん……聞かれてみるとわからんがあ……」

「そう……」

わからぬのに使つてる言葉……わからぬ……でも、嫌いじやないかな。故郷の言葉、だから?

そんなことを考へてゐるうちに車が停車してゐた。

「ほら、付いたぞ。ようこそ玉砕へ」

「…近くに来ると大きい」

「本部はもつと大きいぞ? ほら、あそこに見える四角いやつが本部だ」

リンドウがそういうながら指を指したからその方向を見てみれば、あの国の軍の施設を何倍もの大きさの建物が? あつた。

何て大きさ……あの施設なら貯蓄できるトリオンもかなりの量になるだろうね

……

「すごく、大きい……」

「だろ？だが、玉狹も負けたもんじゃ無いから、入つてからのお楽しみだ」「期待しておく」

そしてリンドウの後ろをテクテクと付いていき、玉狹の中に入ると、大きな声が聞こえた。

「リンドウ!! 白堊は!? 白堊はどこ!?」

「うお!? 急に声出すな！ 驚くだらうが！」

リンドウの前に誰かが出てきたようで、リンドウが驚いている。

誰だろう？ 声からして、女性だけど……玉狹に居る女性……

「小南桐絵？」

「ッ!? 白堊なの!? どこ!?」

ボクが思わず名前を呟くと、聞こえていたのか声が一層大きくなつた。

当たつてたみたいだね

「落ち着け小南！ ハクは俺の後ろだ！」

「！ 退いてリンドウ!!」

「うおあ!?」

ドガツとリンドウが押し退けられ、壁に叩きつけられる。リンドウにが居なくなり前

がよく見えるようになると、そこには茶髪で長い髪の気が強そうな女性がたつていた。
そしてボクを見ると

「ちっちや!?」

「失礼だね。貴女が小南桐絵?」

「ゞ、ごめん!…こんなに小さいと思わなくて…」

小南が慌てて謝罪をしてくる。

まあボクみたいに小さい人は珍しいから仕方ないか

「ボクはLK—021:ではなく、白夢白堊だよ」

「わ、私が小南よ!…よろしく!…白堊!」

「よろしく」

小南は元気だね。元気なのは良いことだ。精神をやられ狂つてしまつた同僚はたくさんきてきた。知らずうちにボクも狂つているのかも知れないけどね。

昔の事を思い出していると、小南がおずおずと質問をしてきた。

「は、白堊…やつぱりその…私を見ても…何も、思い出さない…?」

「ああ、すまないけど、何も」

「…そう…」

そういうつて小南は悲しそうにうつむいてしまつた。しかし、すぐに顔を上げ、ニカツ

と笑った。

「なら！これからは私達と思い出を作れば良いのよ!!これからよろしく！白堊!!」「ああ、よろしく、小南。それと、ボクのことはハクと呼んで」

「ハク？」

「さつきリンドウに付けて貰つた略式の名前だ」

「りやくしき…………？」

ハクと呼んで欲しいと言うと小南は何故か首を傾げてている。何か変なことがあつたのかな？

ボクも首を傾げてると、吹き飛ばされていたリンドウが復帰した

「あゝ小南、略式つてのはあだ名のことだよ、あ、だ、名！」

「ああー！そういうことね！わかつたわ！ハク！」

「そう、なによりだ」

なるほど、あだ名と言うのか。覚えておこう。

「んじや、取り敢えずハクとはまだ話があるんだが、どうする小南、一緒に聞くか？」

「あつたりまえでしょ！これから一杯思い出つくるんだから！」

そしてボクとリンドウ、小南の三人で大きな部屋に行き、話を始めようとした。

「？おいハク早く座れよ」

「どうかしたの？」

「？座つて良いの？」

「当たり前でしょ？立つたまま話をするつもりなの？」

「……取り敢えず座れよ」

ふむ、かなり上質な椅子だけど良いのかな？日本に奴隸はいないって言つてたし、良いのか。そして一人で納得して椅子に座り、

おお！お尻が痛くない！ふかふかだ！こんなに良いものに座つたのは初めて！と、一人で感動していると、リンドウが話し始めた。

「さて、じゃ話を進めるぞ？」

「了解」

「よし、まずは玉狹へようこそハク。今後よろしく」

「よろしく」

「取り敢えず、ハクには玉狹所属の隊員になつて貰う。ま、まずはボーダー本部でランクを上げて貰うがな」

「ランク？」

「階級みたいなもんだ。見習いがC級、正式隊員がB級、精銳隊員のA級、その上にS級があるが、それは特殊部隊みたいなもんだ。ここまでで質問は？」
C・B・A・S……わかりやすいね。多分ボクはCからだと思うけど見習いなら何か制限があつてもおかしくはない。

「それは対人？トリガーの制限は？」

「ああもちろん「対人よ！」……」

リンドウが説明しようとしたところを小南が遮るように代わりに答え、そのまま答えていく

「C級隊員はトリガーを一つしか使えないって制限があるわ！」

「なるほど……ならボクのトリガーは使えないな……」

「え？」

「そのことはいまから話す。小南もおとなしく聞いててくれよ？」

「わ、わかってるわよ！」

リンドウがこれ以上話を遮られない為か、小南に釘を指してから話し出す。

「ハクのトリガーを解析させて貰つたが、あれは普通のトリガーじゃないな？」

「ああ、あれはボクが自分で改造してつくつたトリガーだよ」

「自分で改造!？」

「まあそれしかわからなかつたんだがな。しかし、ハクが改造してたのか……」

それくらいしか娯楽と言えるものが無かつたからね。それに、ボクがここまで生き残れたのはこのトリガーと6感のお陰だ。

「てことでハク、このあと小南とそのトリガーを使って模擬戦して貰つても良いか?」

小南との模擬戦か、戦闘事態は3ヶ月ぶりだけど、いけるかな?

体鈍つてなきや良いけど、まあやれるだけ、やるだけ

「かまわないよ」

「は、ハクが良いあたしも良いけど…」

「よし。決まりだな!まあもう少し話はあるけどな?」

「段取りが悪い!」

リンドウにまだ話があると言われたボクと小南は、既に椅子から腰を上げていた為、ガクツとなつてしまつた。

「まあそう怒んなつて、まだトリガーの話だからよ、さつに何もわからないつて言つちまつたが、少し訂正させて貰うぞ。あれは普通のトリガーじゃなくて、ハク自身が改造したんだよな?」

「そうだよ」

「あれはどうやつて改造したんだ?俺たち玉狹もオリジナルトリガーは作つてゐるが

お前のトリガードはまつたくの別モンだ。それにあれは ブラックトリガーに限りなく近いトリガードだ

「ええ!」

…………そこまでわかっていたのか……ほとんどわかっているようなものだろうに、「……うん、確かにボクのトリガードはブラックトリガードに近いよ。けど、ブラックトリガードみたいに真っ当なものでもない。あれはボクの同僚、奴隸達のトリオンドで作られてるんだ」

「他の…どれ…い? どういうこと? ハク!」

奴隸と言う言葉を出すと小南が取り乱し、ボクに積めよつてくる。

「リンドウ達は、ブラックトリガードの作られ方は知ってるね?」

「ああ」

「えっと、優秀なトリオンド保持者が自身のトリガードに全トリオンドと生命力をつぎ込んで出来るのよね?」

「そうだね。だけど、その生命力とトリオンドを他人のトリガードに注ぎ込んだらどうなると思う?」

「た、他人のトリガードに!」

ボクの言葉を聞く小南が椅子から飛び上がりながら聞き返す。リンドウもボクの言

葉を聞いて目を丸くしている。

まあ、これはあの国のボク達奴隸しかわかつていないことだろうからね。国も、軍も知らない、ボクたち奴隸の秘密

「そう、他人のトリガー、だよ。ブラックトリガーは異常な強さを持つていてるけど、それはその人に馴染んでいるトリガーにその人のトリオンと生命力をいれることで強さや異常性を持つんだ。

けど、他人のトリガーに入ると、そろはならない。単純に強化されるだけなんだ」「単純な…強化？」

「そう、トリガーにはいくつか機能をつけるよね？その機能の個数が増えたり、トリオン伝達が強化されるってことだよ。そのお陰でボクのトリガーはブラックトリガーに近い能力を持つたんだ。

これをボク達奴隸はトラストって呼んでた。そしてトラストされたトリガーはブラックトリガーに近いノーマルトリガー、アッシュトリガーって呼んでいたんだ」

ボクが説明し終わるとリンドウと小南は驚き過ぎたのか口が塞がつていなかつた。そして、リンドウは途切れ途切れに言葉を紡いだ。

「な、なん…にん…だ？」

「リンドウ?」

「ハクの…トリガーは、なんにんの仲間で出来て、るん、だ……?」

「ここまで、気づいちやうんだ……?」

「7人だよ。ボクがトラストしたのは、7人だ」

「そう、か……?」

リンドウはそういうながらテーブルに顔を伏せ、暫く沈黙の時間が続いた。

「……勘違いはして欲しくないから言つておくよ。トラストするのにも、本人の意志が必要だ。それに、トラストするのは奴隸であつたボク達が、あの国に対する最後の対抗手段だつたんだ。あの国はボク達を人としては絶対に扱わない。家畜、玩具、都合の良いモノ、欲望の捌け口……少しでも反抗すればもつとひどい事をされる。それが当たり前だつた。ボクだつてそうだ。殺されはしなかつたけど、ずっと、昔から男に使われ続けてきた」

ボクが使われたと言うと、小南は体を震わせ、涙をながし始めてしまつた。リンドウは拳を握り、震えていた。

「そんな中でも、ブラックトリガーを作れるほどの力を持つてる人は決して少なくなかつたんだ。体を弄られて、トリオンを増やされるからね。そしてこの首輪」

奴隸

そういうながらボクが自分の首輪リンドウと小南に見えるようになると、小南とリン
ドウは今までうつむいていた顔を上げ、首輪を見た。

「知ってるかも知れないけど、この首輪はね、神経に絡むように埋め込まれているん
だ。この首輪がある限り、奴隸は国に逆らえない。言われたことを実行するんだ。どん
なことでも、ブラックトリガーになれ、なんて言われてもね」

ボクがそう告げると、リンドウが拳でテーブルを殴りつける。

「何で！ そんなことが出来る!!」

「奴隸は、奴隸だとあの国の全員が思っているからだよ。奴隸になるのは、拐われてき
た人たち、自分達にとつての近界民ネイバだから、平気で出来るんだ」

「…………」

「だから、そんな国にブラックトリガーになつてやるなんてまっぴらガめなんだ、つてこ
とで、トラスト、アッシュトリガーが出来たんだ」

全てを伝え終わるが、その場を支配していたのは凍りつくような空氣だつた。その
空氣がどれほど続いたのかはわからない。そして口を開いたのは小南だつた。

「…………ハクは、辛かつた？ トラストして、」

「…………その時のボクに聞いて欲しいな、当時のボクと、今のボクじや、考え方がまつ

たく違うだらうからね。でも後悔はしていない。だつて、託してくれたのは皆だから

「そつか……」

そして再び沈黙が続いた。そして、「よし！つまり！ハクは、7人の意思を継いだトリガーで今まで戦つてきたのね！それは凄いことよ!!」

沈黙を破つたのはまたしても小南だった。

「ならあたしに！そのトリガーで挑んできなさい！あたしが証明して上げる！ハク達が作つたその力が！強いつてことを！」

「小南……」

…………小南も、善人……なのだろうか、ボク達を、皆の力を認めてくれる。

「…………だな、ハク、お前は、お前らは誇つていいんだ。お前らをそんな風に扱つていた国は滅んだんだろう？なら滅んだ理由はお前達がアツシユトリガーにして、国に抗い続けたからだ。お前達が、国を倒したんだ」

ああ：みんな、ここは、玄界は良い人たちで溢れてるよ。僕たちを、認めてくれる、あ

いづらとはちがう、んだ

「あり、がとう……」

涙なんて、とつくに枯れたと思つてたのに、まだ出るみたいだ。

リンドウと小南は、泣いたボクを、ボクたちを、やさしく、やさしく、抱き締めてくれた。

主人公説明だよ

主人公 白夢白聖
しらゆめはくあ

17才

アルビノ

身長 139cm

体重 62kg 「体を改造された才に身体能力、治癒能力、筋力を強化、及び埋め込まれたトリオン製金属部品」

具体例

細かい切り傷は1時間ほどで完全に消える

片手でリンゴを余裕で割れる

飛んできた野球ボールをノーモーションでキャッチできる

背骨に沿つて装着されているトリオン製金属はトリオンで出来て

るので破損してもへーき

身体情報

至るところにあらゆる傷跡が残されている。

最も酷いのが作中で受けた上半身の肩下腹部への傷跡。他にも大きな傷跡は残つており、白い肌に赤く残つてゐる。

薬物耐性（媚薬や危ないお薬を使用された為）

痛覚の鈍化

トリオン体の容姿 白マフラーをした白小南みたいなもの

サイドエフェクト 第6感覚

簡単に言うと超高確率で当たる勘

所持トリガー

右腕

アツシユトリガートラスト4 『プラスアンカー』(Rアンカー)

(見た目はブラボのバイルハンマー)

籠手に杭射出機構がついている白堊のオリジナルトリガー

杭の形状は 杭型 弧月型 爆裂型 完全射出型 に変えられる

杭型は相手に杭を撃ち込む貫通特化 レイガストのシールドを破壊できる程の貫通力を持つ

弧月型はノーマル弧月と同様に切断特化
 爆裂型は撃ち込んだ杭から爆発するトリオンを注入し、内部から破壊する内部破壊特化

これらに完全射出型をあわせて使用すると、

杭型は遠距離攻撃が可能

弧月型はやる意味無し（だって杭で良いじやん）

爆裂型は榴弾になる（距離によつて刺さらず、爆発しない場合がある）

消費トリオン

杭型の切り替えは基本0に近い。

爆裂型に限つて消費トリオン中（爆発性トリオンを変換する為）

射出した場合の補充トリオン量

杭型 小

弧月型

爆裂型 大（メテオラより少ない位）

左腕

アッシュトリガートラスト3 『ブラストアンカー』（Lアンカー）

右腕のアンカーとは違い、完全射出型、弧月型の使用は不可能
爆裂型の威力がRアンカーよりは劣る

その代わりにワイヤーの付いたアンカーを射出することで立体起動が可能になつて
いる。撃ち込んだワイヤーアンカーのあとに再度ワイヤーアンカーを撃ち込むことで、
それロープとして扱うことも出来る

使用可能なのは

杭型

爆裂型（劣化）

ワイヤーアンカー

他にも基本のシールド系統も使用可能となつていて。

プラスチックアンカーは装着した腕の回りを回るように動かすことが可能になつていて。

プラスチックトリガーナイフ、トラストシタニンズウガオオイカラコウナツタンダヨ

良いね？（洗脳済み）

文字数が微妙に足りなかつたから適当にいれてるよ
あと、みんな曇らせ好き過ぎじやない？

白堊の実力

「もう、だいじょうぶ」

ボクが泣いてしまつてからかなりの時間がたつていた。その間リンドウと小南はずつと抱き締めてくれた。ボクがもうだいじょうぶと言うとリンドウはゆっくりと離れていった。けど、小南はボクを離さずに、ボクを抱いたまま椅子に座り直す。

「そうか…まあ、なんだ、これでハクと話したいことは全部だ。話してくれて、助かつた」

そう言いながらリンドウは深く、頭を下げた。すると、ボクを抱いていた小南が

「じゃ、模擬戦するわよ！」

と、声高らかに言い張つた。そう言えば模擬戦する話だつたね。

「うん。ボク達の力、見せるよ」

「ああ、目に焼き付けさせて貰うぞ」

そして何故かボクの手を握ったままの小南に連れられて玉狹の地下へと向かつた。小南の手は、とても暖かくて、胸の奥がぽかぽかした。初めて覚える感覚に少し戸惑つたけど、嫌いじやない。

「……が玉狹の誇るシミュレーション室だ。本部の物とかわりないぜ」

地下に付くとそこではメガネをした女性が薄い板？をじつと見ていた。あれは何？ボクが板を見ていると、リンドウが女性に声をかけた。

「よ、宇佐美、こいつがこの前話した、白堊だ」

「あ、やつときた！ こんにちは！ 私は宇佐美栞、玉狹のオペレーターをやつてるよ！」

「白夢白堊、ハクって呼んで欲しい。よろしく」

「はい、よろしくねハクちゃん」

やつぱり気になるな、あの板……うさみがずっと見ていたから、重要なもののなのうか？

「うさみ、あの板は何？」

「ん？ 板？……ああ、パソコンのことかな？」

「ばそこん？」

「ばそこん……変なの、ボクは心の中でもそう思いながら首を傾げていると、うさみがばそこんについて説明をしてくれた。

「あのパソコンでこのシミュレーション室を管理してるんだよ」

「なるほど、制御端末か、ありがと、うさみ」

ボクがうさみにお礼を言うと、うさみは「どたまして！」と笑いながら不思議な言葉

を返して来た。日本は不思議な言葉が多い

日本の言葉に感心していると小南が

「宇佐美！これからハクとあたしで模擬戦をするわ！準備して！」

「はいはい、じゃあハクちゃん。とりあえず、トリガーを起動してみてくれるかな？」

トリガー……リンドウにまだ返して貰つてないな。そう思い後ろ手座つてたリンドウを見つけ、声をかける。

「リンドウ、ボクのトリガーは？」

「お？ おお、すまん、返してなかつたな、ほれ」

そう言つてリンドウはボクの二つのアッシュトリガーを投げ渡そうとして、一度止まり、ちゃんと此方に近付いて手渡してくれた。

恐らく、トラストした皆を雑に扱いたくなかったんだろう、本当に、善人だね、リンドウも、皆も

「ありがと」

そう言いながらボクはトリガーを腕に入れようとして、腕を開くが、久しぶりに開いたせいか、少し血が流れてしまつた。あまり痛みを感じなくなつたボクの体は大丈夫だけど、小南達はそれをみて顔を青くしてしまつた。

「は、ハク！ それ、大丈夫なの？」

「ハク、無理はするなよ」

「だいじょうぶ、久しぶりだつたから、塞がりかけてただけ、それに痛みは感じてないよ」

「そうか……とりあえず、血イ拭いとけ、ほら」

そう言つてリンドウは布を渡してくれた。それで血を拭うと、布は赤く染まつた。布を近くのテーブルに血で汚れないように起き、トリガーを起動させた。

「トリガー 起動^{オーン}」

トリガーを起動すると体がトリオン体へと変更されていく。3ヶ月ぶりの感覚に懐かしさを覚えた。

ああ、こんな感じだつたかな

トリオン体へ変更し、最後に白いマフラーが出てくる。それをボクは慣れたように手に取り。髪を巻き込まないよう首に巻いていく。すると、うさみが感心したように声を上げた。

「わあ！キレイ！全身真っ白だね！マフラーも似合つてる！」

「少し、小南に似てるな……」

「よし！じゃ私も！トリガー 起動^{オーン}！」

リンドウどうさみが感想を言つてゐる間に小南もトリガーを起動し、トリオン体へ変

更する。小南のトリオン体は長かつた髪は短くなっていた。

確かに、ボクのトリオン体と似た服装だね。

「おお～、二人が並んだと姉妹みたいだね！」

「確かに、小南の方がデカイから小南がねえちやんだな。見た目だけは」

「見た目だけはつて何よ！」

ボクと小南が姉妹……か

「こなみねえさん？」

ボクが首を傾げながら言うと小南達は黙つて顔を背けてしまった。なぜ？

「やつばあ……破壊力たかあ……」

「？やらないの？」

何故か全員が無言なのでボクがやらないのかと聞くと、やつと三人は動き出した。

「あ、うん、じやあやろつか、小南ちゃんとハクちゃんは0-1室に入つてね」

「わかつたわ」

「了解」

そして小南と0-1に入ると真っ白な空間が広がつていた。

「……白い」

『は～い、じや、まずはハクちゃんのトリガーの紹介をして貰うよ～！標的を出すか

ら、それに向かつて攻撃してね！」

うさみ？ そう思い回りを見渡すがうさみの姿は無い。どうやら声だけのようだ。

そして、目の前に小型のバムスターが出現した。たぶんこれがうさみの言つていた標的なのだろう。そして両腕の＜プラスチックアンカー＞を起動させる。

「え、なによそのトリガー？ グローブ？」

プラスチックアンカーを見た小南がぐろーぶ？ と言つた。後でどんなものか聞いておこう。そして、今度はうさみではなく、リンドウの声が聞こえた。

『あー、ハク、簡単にで良いから説明頼めるか？』

「了解」

そしてまずは右腕のアンカーを掲げながら説明を始める

「ボクのトリガーは＜プラスチックアンカー＞この射出機構でトリオングルで出来た杭やブレードを射出して破壊するものだよ。他にも杭を飛ばしたり、爆発させることができる」

そういうながら数メートル先のバムスターに杭を撃ち込むと、コアを守る最も固い頭部を杭が貫通し、バムスターを倒す。

そして、次は左腕を掲げる

「左のアンカーはさつきみたいに杭を飛ばしたり、ブレードをだすことはできない。

それに、爆発の威力が低い。そのかわりにワイヤーの付いたアンカーを使って立体機動が出来るよ』

そう言いながら復活していたバムスターの足元にワイヤーアンカーを撃ち込み、ワイヤーによつて高速移動をし、接近したところでRアンカーの炸裂杭を撃ち込み、内部から爆発させ倒す。

「ボクの戦闘スタイルは立体機動をしながらの接近戦、まあ、殴り合いだけどね」

言い終わるとリンドウの声が再び室内に響く

『ほえ？……遠距離も近距離もできるのか……その爆発するのも飛ばせるのか？』

「うん。けど、距離とか装甲の厚さによつて刺さら無いまま爆発したりするから、遠距離運用したいならもう少し改良したい」

『なるほど……それなら今度本部で出来るように俺が掛け合つておく』

「ありがとう」

これで説明は終わつたけど、やつと小南と模擬戦できるのかな？

そう思いながら小南を見てみると、口を開け、目を見開いていた。

「…………小南？」

「え、あ、じゃ、じゃあやりましようか！」

どうやら小南は驚いていたようだ。そして始めようとするが、うさみが

『ハクちゃんは小南ちゃんのトリガー聞かなくて良いの？ 小南ちゃんのも結構特殊だよ？』

そう言われ、小南の手元を見ると小型の斧のようなトリガーが両手に握られていた。
「いい、やれば、わかるから」

『そつか、じやあ、小南ＶＳ白夢よーい、スタート！』

号令がかかった瞬間、ボクは体を屈め、低姿勢のまま小南に走り出し、一瞬で小南の目の前に近付いた。小南は反応が遅れたが、すぐに小斧で攻撃をしてくる。それをボクはシールドで防ぎ、そのまま杭をシールドごと撃ち込み小南の心臓の部分を破壊すると、機械音声がながれ、小南とうさみが驚いた声を上げた。

＜小南桐絵　トリオン供給器官破損戦闘続行不可＞

「う、うそッ！」

『ええく……』

「これはボクの得意技だよ。今のところ、防がれたことは無い」

「でしようね……自分で自分のシールド破壊するなんてことは普通出来ないし、やら
ないわよ」

だろうね。まずシールドを一撃で破壊できる威力はアンカー以外で見たこと無いしね。

『シールド破壊……ブレイクアタックつてどころか？』

ボクが小南と話しているとリンドウがまた名前をつけたみたいだ。今後はそう呼ぶことにしよう。でも、リンドウは名前をつけるのが好きなのかな？

『じゃ、二本目行つてみようか！あ、さつきとは違う戦い方してね？』

「了解」

違う戦い方か……あ、さつきリンドウに言つた炸裂杭を使おうかな

『小南ＶＳ白夢 ラウンド2 よい、スタート！』

瞬時に杭を爆裂杭に変更する。小南は先手をとるため既に此方に走り、接近していく。ボクはワイヤーアンカーを使い、左へ飛ぶ。さつきまで居た場所にはさつきまでの小斧ではなく、大きな斧を振り抜いた小南の姿があつた。

「チツよく避けるわね！」

小南はそう舌打ちをし、すぐに此方へ向かってくる。ボクは向かってくる小南に爆裂杭を射出する。しかし、さつきのブレイクアタックを警戒したのか、シールド大斧真つ二つに切り裂いた。切り裂かれた杭は爆発し、煙を上げるが小南はとっさにシールドで防いでいて無傷だつた。

「爆発……やつぱり手強いわね……」

小南は回りの煙でよく見えないのか回り見渡していた。そこにボクは杭をブレードに切り替えて突っ込んでいく。

「!!そこー！」

小南はボクに向かつて大斧を横になぎ払うようにして攻撃する。

ボクは左腕のアンカーを手首の下に移動させ、地面に左手を付けるようにして身を屈め、攻撃を避ける。そして、地面に先端を平らにした杭を撃ち出し、その反動で小南の懷に潜り込み、ブレードで攻撃をするが、シールドで防がれてしまう。

「二度も同じ手は喰らわないわよ!!」

小南はそう言いながら大斧を片手で持ち直し、体をごと回転させながら後退し、回転の反動を使い回し切りをする。今度はしつかりとボクのことを捕らえている。それをボクはブレードで受け止め、弾き距離取るが、小南はそのまま再び突っ込んできていた。即座ざに左手のアンカーをワイヤーアンカーに替え、小南に向かつて撃ちむ。それを小南はシールドで防ごうとして上半身にシールドを展開させるが、アンカーは当たらず、小南の股下を通り抜けて着弾した。

「外したわね!!」

小南はこれを好機と見て、接近しながら大斧を振りかぶるが、

「ボクの勝ちだ」

ボクはそう宣言しながらワイヤー アンカーで小南の股下を通り抜け、小南の背中にRアンカーで爆裂杭を撃ち込み小南は爆発し、再び機械音声が宣言した。

「小南トリオン漏出過多 戰闘続行不可」

「ああもう!! 絶対に勝つたと思ったのに!!」

煙が晴れるごとに小南は上向きに倒れながら手足をバタバタとさせていた。うさみや

リンドウが声をかける

『惜しかったなあ～小南～』

『もうちょっとだつたねえ』

『ドンマ～イ』

「うがあああ～～!!」

リンドウとうさみに言われ、より一層手足をバタバタさせる。そんなに悔しかったの

……なんか子供みたいになつちやつてるよ

「もうやめる?」

「まさか! まだまだこれからよ!!」

そういって小南と白堊は合計10戦戦つた。

結果は

小南 ? ? ? || ? || || ? || ?

白堊 ○ ○ ○ || ○ || || ○ || ○

白堊の6勝4分0負だつた。

「そんな……このあたしが……」

「上には上がいるつてことだな小南。これからはハクと対戦して、もつと自分を磨くんだな」

「ひえ……一応、小南ちゃんN.O. 3の強さなんだけどなあ……」

「小南は強かつた。とつても」

「まあハクが勝つとは思つていたが、まさか小南が一勝も出来ないとは思つてなかつたなあ……」りやあ、すこし変更しなきやなあ……」

変更? どういうこと? もしかしてボーダーに入れないつてこと?

「変更つて?」

「ああ、お前さんをC級隊員にしちまうと、お前の同期が荒れそだからなあ、第2のプランに替えるだけだ」

第2のプラン……なんだろう……リンドウはそのまま部屋を出ていつちやつたし、うさみなら知つてるかな?

「うさみ、第2のプランつて?」

「ふつぶくん、第2のプランつていうのはねえ、ハクちゃんを、復帰してきたボーダー隊員つて設定で、玉狹に所属して貰うつてプランなのだよ! つと、すこしまつてですね」

か
な？
そ
う
い
う
と、
う
さ
み
は
ポ
ケ
ツ
ト
か
ら
ま
た
板
の
様
な
物
を
出
し
た。
あれ
も
ぱ
そ
こ
ん
な
の

「リンゴさんがね、ハクちゃんが話したことと、さつきの戦いのデータを本部に伝えてもいいかだって、どうする？」

構わないと伝えて

「らじや」

リンドウ Sidde

俺は、ハクと小南の戦闘データを入れたUSBメモリを持ち、本部の会議室にいた。そこでハクから聞いたアツシユトリガーと、トラストについて説明をしていた。

俺がそう締めくくると、開発室長の鬼怒田が深いため息を出した

「はあ、そういうことか……白堊ちゃん自身が改造していたとは…：トラスト、アツシユトリガー、どれも白堊ちゃん達が生み出した奇跡のトリガーか、我々に使う権利はないし、使つてはいけないものだ」

鬼怒田がそう告げると集まっていた全員が肯定するように頷いた。そこで俺はハクがトリガーを改良したいと言つていたのを思い出した。

今なら言えつかな？

「鬼怒田さん。白堊がアツシユトリガー、〈プラスチックアンカー〉を改良したいそуд。良ければ開発室を貸してはくれねえか？」

俺がそういうと鬼怒田さんは驚いたような顔をした。タヌキみたいな顔だな。

「それは構わない。ならば、白堊ちゃんの改造技術を教えて貰うように言つて貰えないかね？勿論、嫌ならいいが」

「わかりました。白堊に掛け合つておきます。あと、今日は白堊と小南の模擬戦のデータを持ってきました」

俺はポケットに潜ませていたUSBメモリーを全員に見えるようにする。すると、愕の声が上がった。

「なんだと!？」

「早く見せてください！」

「N.O. 3の小南とか……それで、結果はどうだった？」

忍田がそう聞いてきたので、俺はUSBをセットしながら答える。

「結果から言うと、10戦中、小南は6負4分、一度も勝てませんでした。分は全部相討ちです」

それを聞いた忍田は椅子から飛び上がり驚愕した。

「なんだと!?あの小南がか?!」

「ええ、それもプラスティックカードの機能をデモンストレーションした後で、です。まあ、映像を見ればわかります」

そういうつて映像を流す。映像がながれていく間全員が黙つて見ていた。時折、「なつ！」とか、「は?」等の声が上がつたが、それだけだつた。映像が終わり、忍田は感嘆の声を上げた。

「小南相手に流石としか言い様が無いな……はある……彼女は、これ程強いのにあんな大怪我をしていたのか……」

「やはり、奴隸としての扱いを受けていたからでしょう。彼女は自分が負けそうになつたとき、必ず相討ちに持つていつています」

沢村がそう口にすると再び全員が沈黙する。これじや話が進まねえな……

「話を進めますが、後半はブレードを使つては戦っています。恐らく、ノーマルトリガーを持たせても同じような結果になるでしょう。白聖を普通入隊させては、あまりにも目立ちすぎます」

俺がそこで一旦言いきると、今まで黙つて聞いていた城戸指令が口を開いた。

城戸指令がそう言うと、他のメンバーは困惑していた。そこで唐沢が先陣をきつて言葉を発した。

「城戸指令、第2のプランとは何ですか？我々はノーマルトリガーを持たせ、入隊する」としか知りませんが」

「ああ、第2プランは私と林藤しか知らないからな」「第2プランに閑しても俺から説明します」

「第2プランに関するも俺から説明します」

「第2プランとは、白堊を、一次進行で引退したボーダー隊員が復帰し、小南と同じランク外隊員にする、と言うプランです」

「なるほど…確かにそれならば無駄ないござこざは防げるか…」「幸い入隊式も近い。そこで発表してしまえば良いだろう」

よし、割りとすんなり認めてくれたか……

「では、白堊には第2プランを適応、
と言うことで決定して良いでしようか? 城戸指

令

「あ
あ、

構
わん

ボーダー入隊

「つーわけで、ハクは復帰したボーダー隊員として入隊することが決まりました、いえ～い」

リンドウは帰つてくるなり上機嫌で報告をしてきた。どうやら今まで本部でボクについての報告をしていたようだ。いえーいつてなに？

「リンドウ、ボクが入隊することはわかつたけど、詳しい設定は？」

「え？ 設定？ さつき言つたろ？」

「まだ復帰しただけのボーダー隊員としか聞いていない。なぜボーダーをやめたのか、なぜ復帰したのか、そういう設定は必要だろう？」

「あ～…………確かになあ…………どうすつかなあ…………」

どうやらリンドウは何も考えて無かつたみたいだ。本部もなんで設定を考えずに許可したんだ……ん？ この匂いは？ 火薬……でもないし、なんだろう……

「リンドウ、この匂いは何？」

「んお？ スンスン……お、これは小南のカレーの匂いだな！ 小南のカレーはうまいぞ

？」

「かれー？ 食べ物か？」

「ああ！ カレーを嫌いなやつは日本にいない位のパーエクトな食いもんだ！ 楽しみにしとけよ！」

「……そうか、期待しておくよ」

かれー……日本に嫌いな人はいないのか……もしかして、薬物が入っているんじや……いや、リンドウ達は善人だ。薬物を使うとは考えられない。害があるものは使わないか。

ボクはそう考へながら、かれーの匂いを辿つていった。辿つていった先では小南が鍋をいじくり回していた。あれがかれーなの？

「小南、それがかれー？」

「あ、ハク！ そうよ！ 今日は私が作つたカレーよ！ もうすぐ出来るからテーブルの椅子に座つて待つて！」

「了解した」

そして、とけい？ ボーン！ と音がなると、うさみとリンドウが部屋に入つてきた。

「あくお腹空いたー！ お、今日は小南ちゃんのカレーかあ」

「小南、俺は大盛で頼むぜー」

「分かつてるわよボス！ ほら、出来たわよ！ 召し上がる！」

そういうつて小南は白いものに茶色のものがかけられたのを運んできた。匂いから察すると、これがカレーみたいだ。けど、この白いのは？……カレーの匂いが強すぎてなにも匂いがしないね

「うさみ、この白いのは？」

「白い？……ああ！ご飯だよ！日本人の主食！日本人は殆ど毎日これを食べるんだよ！カレーとは離れられない相棒だよお～！」

なるほど……これでエネルギー補給をしているのか、病棟でもおもゆ、というものを飲んだが、それとは別のものか、ボクがそう考えていると、カレーを運び終わったのか、小南もテーブルに着き、手を合わせていた。リンドウとうさみもやつっていたので、ボクも見よう見まねでやつてみる。

「はい、じゃあ食べるわよ！いただきます！」

「「いただきます」

「??」

「小南、いただきます、とは何？」

「え？えっとお……ご飯を食べる挨拶よ！」

「それだけじやねえだろ小南、ハク、いただきますつてのは、このカレーになつた生き物にあなた達の命をいただきます、て、感謝をする言葉でもあるんだ。そして、食べ終

わつたらごちそうさまでした。あなた達の命をいただきましたって意味だ』

……なるほど、このカレーは生物だったのか……カレーになつた生物に感謝を……日本人は本当に不思議だ。

「なるほど、では、いただきます」

ボクも一口カレーを食べると、舌に不思議な感覚が広がつた。咀嚼している間ずっとそれは続き、飲み込んで、その感覚は消えず、胸の奥がぽかぽかした。この不思議な感覚は？

カレーを食べるボク見ながら、リンドウは話しかけてきた。

「小南のカレーはうまいだろ？」

「……ゴクツ、うまい、ていうのは、よくわからない。ただ、カレーを食べていると、胸の奥がぽかぽかする」

「それがうまいってことだ。うまいって感じたら、作ってくれた人に美味しいって伝えるのが礼儀だ」

「なるほど、では、小南、カレー、美味しいよ」

「ふふん！でしよう？まだあるから、一杯食べなさい！」

「どうか、なら頂こう」

「「「（）ちそうさまでした」」」

ボクたちはカレーを食べ終わり、うさみとリンクドウが食器を片付けていた。その間小南はボクを抱きしめながら、そふあに座つていた。

「そういえば、ハクはあつちでどんなのを食べていたの？あつ」

その質問を問い合わせてすぐ、小南はやつてしまつた、という声を出した。あつち、と言るのは國のことだろうね

「国ではまず、味のするものは無かつたよ。まあ、ボク達だけだろうけどね、味がするのは媚薬、薬物、精液くらいだつたよ」

ボクがそう続いている間、小南はボクのことをぎゅつと強く抱きしめ続けていた。

「…………ごめん、その…………」

「別に構わないよ。ボク達はそれが当たり前だつたから、辛いとは思つていなかつた

よ」

ボクはそういうが、小南は以前の落ち込んだまま、ボクを抱きしめ続ける。すると、片付け終わつたリンクドウとうさみが寄つてきた。

「おつかれさんと、ん？どうした小南？食いすぎて腹でも痛いのか？」

「ええ？ 大丈夫？ 小南ちゃん」

「そういうんじゃないわ……」

「…………とりあえず、ハクの部屋を決めるか、まあ、まだ片付けがすんでいないから、今日は小南と一緒に寝て貰うことになるが、良いか？」

一緒に寝るということは……そういうことかな？ 小南にはボク達を認めてくれた恩があるから構わな「ハク、お前の思つている意味じやねえからな？」……違うらしい……

「あ、あたしは大丈夫よ」

「ボクも、小南が良いなら」

「じゃ、決まりだな。小南、一旦ハクを部屋に連れてつてくれ、少し話がある」

「……了解、ボス」

ボクは小南の部屋に案内された。小南の部屋は甘い匂いがして、何故か落ち着いた。そして小南はボクを部屋に置いて、リンドウと話をしに行つた。話つてなんだろう？

——小南 side——

ハクをあたしの部屋に連れていいつてからリビングに戻つて、ボスとうさみと話をしていた。話の内容は、さつきハクから言われたことだつた。

「…………そうか……カレー食つてるときにもしやと思ったが、まさかそこまでだつた
なんてな……」

「…………ハクちゃん、私たちが思つてる以上のことを、当たり前だつて、感じるまで
……」

ハクの話を聞いてボスと葉はくらいい顔をしていた。あたしも、ハクの口から媚薬や精
液なんて言葉が出た瞬間、聞いたことをひどく後悔した。

「小南 ハクは辛いことだと思つてないから大丈夫だったが、できる限り、過去のこと
は聞かないでやつてくれ」

「ええ……わかつてるわ、ボス……」

「葉……、あたしに、もつと、料理を教えて欲しいの」

「え? これまたどうして……」

「…………ハクに、もつと、色んな味を知つて欲しいの……もつともつといっぱい、美味し
いの食べて欲しい……だから……」

「……おーけー小南! 私も協力するよ!」

「葉……! ありがと!」

「かんばれよ、小南。とりあえず今日はハクと一緒に風呂に入つて、使い方を教えて
やつてくれ。そんで今日はもう寝ろ」

「わかつたわ！」

ボクが玉狹に来てから1ヶ月がたつた。そして、今日はボクが正式にボーダーに入隊する日だ。

「……小南、起きて」

「んむう……」

結局、ボクの部屋は小南の向かい側の部屋になつた。部屋が決まつたというのに、未だにボクと小南は一緒に寝ている。まあ、寝ているといつても、小南に抱き枕にされている。まあ、小南とくつつけて、ボクも嬉しいし、安心して眠れるから嫌じやない。けど、遅刻しそうになるなら別だ。

「……小南」

「すやあ……」

「…………」

仕方ない、小南を無理やり引き剥がして起き、着替える。ボクの服はほぼ全部小南が選んでくれた。小南のセンスが良いのか、うさみやリンドウにも好評だ。

着替え終わり、小南の部屋を後にする。リビングに行くと、レイジさんが朝食を作つていた。

「おはよう、レイジさん」

「ん、ハクア、おはよう。もうすぐ出来るから待つてくれ」

「わかつた」

レイジさんはこの玉伯に所属している男性だ。腕もかなりたつから、たまに手合わせをしている。それにレイジさんは料理も上手で、よく朝はレイジさんが作つていて。今日はレイジさん特性、肉肉肉野菜炒めみたいだ。

「ほら、出来たぞ。今日は入隊式だろ？ 遅れるなよ」

「うん、わかつてるよ。いただきます」

――――――

「（）ちそうさまでした」

「お粗末様でした」

朝食を食べ終わり、支度をすませると、リンドウが迎えに来てくれた。

「おっす！ おはよう！ ハク！ 準備は出来てるか？ 出発だぞ！」

「おはようリンンドウ、準備はできるよ」

「今日はハクの晴れ舞台だ！ 気い張つていけよ！」

本部に着くと、既に多くの新人とみられる隊員が集まっていた。リンンドウ曰く、ボクの紹介もするから、非番の正規ボーダー隊員も集められているとのことだ。詳しく述べては聞かされていないのか、「何で俺たちが入隊式なんぞに……」など悪態をついていた。

リンンドウに連れられて、式場の裏方に行くと、鬼怒田開発室長が話しかけてきた。

「久しぶりだね白堊ちゃん。ブラストアンカーの調子はどうかね？」

「良い調子です。鬼怒田さんが協力してくれたお陰です」

「そうかそうか、それはよかつた。またいつでも来てくれ。歓迎するよ」

リンンドウが掛け合つてくれたお陰で、ブラストアンカーは強化することが出来た。しっかりととした設備を使えたから、最適化ができて、少し要領が空いたから、新しい機能を追加することが出来た。鬼怒田さんには感謝しかない。すると、忍田本部長が話しかけてきた。

「白堊君、そろそろ時間だ。準備をしてくれ」

「わかりました。トリガー オン」

ボクはアツシユトリガーを起動し、アツシユのトリオン体になる。どうやら最初から特別なトリガー使いとして紹介するため、ブラストアンカーを装備して登場する。「～～では最後に、今日付けで復帰する隊員を紹介する」

忍田本部長がこう言うと、ザワザワと騒がしくなった。そろそろ出番だね。ボクが裏方から会場に出ると、より一層騒がしくなった。

「彼女は第一次侵攻で生身に怪我を負い、今まで治療をしていた。だが、治療が終わつたため復帰することになった。彼女は特殊なトリガーを使うため、通常のランク戦には参加しないことになっている。では白聖君自己紹介を」

「玉柏支部所属、白夢白聖、よろしく」

ボクが短く自己紹介をし、入隊式は幕を閉じ……無かつた。

「では、今から嵐山隊と白聖君による模擬戦をして貰う」

「忍田本部長!？」

声をあげたのは、小南のいとこの嵐山さんだつた。つまるところ、嵐山隊の隊長だ。

「忍田本部長! 聞いてないですよ! それに、嵐山隊ということは、4対1です! 白夢さんが不利ですよ!」

確かに多対1になるけど、それは慣れている。それに、小南やレイジさん、烏丸さんや迅さんとやってたりしていたから、鈍つてはいない。

「白聖君は復帰したてだが、S級隊員の迅、他に小南桐絵と互角以上に戦える実力がある。その心配は無用だ」

「なつ!?

「ボクは構いませんよ」

「白聖君もこの通りだ。嵐山隊には白聖君のデータを送る。白聖君にも嵐山隊のデータを送るから、準備をしてくれ。諸君も移動して欲しい」

忍田本部長がそういうと、新人達は正規隊員につれられていった。そして、ボクも移動し、戦闘ベースに入り、嵐山隊の戦闘データを確認する。

嵐山さんは瞬間移動の中距離、近距離を使い分けるオールラウンダー

木虎さんはワイヤーを使つた近距離特化のオールラウンダー

時枝さんは、サポート特化かな? 援護射撃、防御、連携……厄介だね……最初に落としておいた方がいいね

最後の佐鳥さんは……ナイパーか、それも、二丁持ち……一回で2発攻撃できるのが厄介だ。場所がわかり次第、エクスパイアル^{新技}で落とそう。

データを確認し終わつたことを伝えると、嵐山隊もデータ確認を終えたらしく、イヤホンからうさみの声が聞こえた。

『やつほゝハクちゃん。大変なことになつたねえ、まあ安心しておきなさい！この私がハクちゃんを勝利へ導いてあげようぞ!!』

「うさみ、よろしくね？」

『大船に乗つた気持ちでいなさい!!』

そして、嵐山隊との模擬戦が始まつた。

〈トリオン体転送開始〉

転送がされると、市街地に転送された。

『ここは市街地 a だね、ここは坂道と高低差のある住宅街だよ。スナイパー や シューターが有利になるステージだから気をつけてね』

「わかった」

〈模擬戦闘 嵐山隊 v/s 白夢白堊 スタート〉

そして戦闘が始まつた。遠距離攻撃が有利なら、隠れつつ移動しないと……！

『右の赤いビルだよ！』

「あつぶな……」

移動しようとすると右前方から狙撃をされた。サイド・エフェクトのお陰で避けられた。即座にエクスパイアルをうさみが言っていた赤いビルのに撃ち込むが、すこし下にずれてしまつた。着弾し、大爆発を起こさせると、ビルが崩れながら、土埃と衝撃波が襲ってきた。……ちよつと、威力を込めすぎたかな？

エクスパイアルは鬼怒田さんと一緒に開発した、プラスチックアンカーの新技だ。爆裂杭に更にトリオンを注ぎ込むことで、飛距離、貫通力、爆発威力を向上させた。消費するトリオンも通常の爆裂杭の1/8本分にもなるし、見た目も1メートルを超えるから、ばれやすいのが欠点。

通常は時間をかけて威力を調整するけど、とつさのことでトリオンを込めすぎたらしい。

〈佐鳥ベイルアウト〉

『え？』

『ん？』

『ええええええええ！？』

「一人減った、ラツキーだね」

スナイパーを落とせたのはラツキーだったね。これで近距離、中距離に集中できる。

「よし、どんどんいこう」

『お、おお～？』

「はあ!? 佐鳥先輩何してるんですか!?」

『いやあ～……めんぼくない……』

通信で佐鳥がペイルアウトしたことでの、木虎は激怒していた。佐鳥が狙撃したあと、『あ～ふせがれちゃいましたねえ……おろ? 何か飛んできて……いや、あれは無視していドゴーンツ!!!』

ということだった。佐鳥が当たらないから大丈夫という慢心をした結果、大爆発に巻き込まれてペイルアウトしたのだつた。

「何が大丈夫ですか! ねえ!」

「落ち着け木虎、あの威力のデータは無かつたんだ。だが佐鳥、油断するのはいけないぞ」

『すいません隊長……』

怒る木虎を嵐山がおさめつつ、嵐山も佐鳥を軽く叱る。すると、遅れて合流した時枝が

「白夢は高威力の遠距離攻撃が出来ることがわかりました。あの威力は厄介です。でも近距離だとシールドの意味が無くなるので、中距離戦闘をしましょう」

「了解」

「いました」

「よしそのまま……一斉射撃開始!!」

—————

「ん?……!!」

『ハクちゃん!後ろ!』

勘にしたがつて後ろを振り向いた瞬間、マズルフラッシュが見えた。直ぐにシールドを張り防御をする。シールドを張りつつ、遮蔽物に身を隠す。

「うさみ、場所わかつた?」

『うん。西側の青い屋根の家の近くだよ』

「ありがと」

多分三人一緒に動いてるんだろう。小南に嵐山隊は連携が鬼、と聞いている。出来れば各個撃破したかつたけど……仕方ない。中距離は相手の間合いだから無理やりにでも接近戦に持ち込まなきやな……：

遠距離からエクスパイルを撃ち込んで紛れながら接近するしかないかな……いや
……固まつてゐるなら……引き剥がせば良い

そして、エクスパイルの準備し、三人の位置を確認する。よし……今！

三人の中央辺りにエクスパイルを撃ち込み、爆発させる。三人はギリギリでシールドを張り、ダメージは受けなかつたものの、吹き飛ばされてしまつた。周囲は土煙で包まれ、視界が悪くなり、嵐山が無事か確認するため、声を出してしまつた。

「木虎！ 時枝！ 無事か！」

「はい！」

「大丈夫です！ うわあ！」

そこか、時枝さんの声がしたところにワイヤーアンカーを撃ち込み、引っこ抜く。すると、方辺りを後ろから貫かれた時枝さんを釣り上げた。後ろを向く時枝さんの首をブレードで両断する。

「ええ、こんなのアリなのかな」

そう呟き、時枝さんはペイルアウトしていつた。

〈時枝ペイルアウト〉

ペイルアウトを確認し、念のため、木虎の声がしていたところにブレードを射出し、通

常の爆裂杭を装填する。

「きやあ!?」

ブレードが射出された先からは木虎の声が聞こえた。土煙がうつすらとブレードが太ももをかすつてトリトンが漏れていた。すぐに木虎に爆裂杭を撃ち込み、爆発させる

〈木虎ベイルアウト〉

木虎をベイルアウトさせた瞬間、銃弾の弾幕が飛んできた。シールドで弾幕を防御しながら、エクスパイルを装填し直しながら撤退する。土煙が完全に張れると、嵐山さんが弾幕を張りながら突っ込んできた。

「うおおおお!!!」

瞬間、嵐山さん視界から消える

『ハクちゃん後ろだよ!!』

うさみの声を頼りに後ろを向くと、スコーピオンに持ち変えた嵐山さんが既に切りかかっていた。体を反らせて回避するが、左腕を持つていかれた。嵐山さんがボクのエクスパイルを見ながら

「この距離なら君と相討ちに持つていいけるだろう!!」

相討ち狙いか、確かにこの距離でエクスパイルを使えばボクもベイルアウトするだろう。さつきと同じエクスパイルならね？

「残念だけど、ボクは死なないよ」

そういうって、エクスパイルを射出し、嵐山さんの胸を貫く
「ははは……爆発しないのか……」

〈嵐山ベイルアウト〉

〈戦闘終了 勝者白夢白堊〉

こうして模擬戦はボクの勝利で終わつた。

嵐山

嵐山隊との模擬戦の後、ブースから出ると歓声が聞こえてきた。何事かと回りを見渡すが、全員がボクの上に視線を向けていることに気づいた。

上には大きなディスプレイがあり、ボクが時枝さんを釣り上げたシーンや、エクスパイルで爆破するシーンなど、ボクが嵐山隊を撃破する場面が繰り返し流されていた。

「——いやあ／＼スッゴい威力だつたよ／＼凄いね君」

ディスプレイを見上げているとブースから出てきていた佐鳥さんが話しかけてきた。

「白堊ちやんだつけ？俺は佐鳥！よろしく！」

「白夢白堊、よろしく……？」

佐鳥さんと挨拶を交わしていると視線を感じた。視線を感じた先にはボクを見つめるメガネのC級隊員と、女人の人人が四人ほどいた。ボクと目が合うと、目をそらし、どこかへ行ってしまった。

ずっとメガネ隊員と四人を見ていて佐鳥さんをほつたらかしにしてしまった為、佐鳥さんが声をかけた。

「白堊ちやん？どうしたの？」

「…………メガネ」

「め、メガネ？白聖ちゃんはメガネ付けてるの？」

「？付けてない」

「ええ……？」

「いやあ～！良くやつたよハクちゃん！」

「うさみ」

佐鳥さんと囁き合わない話をしているうさみが駆け寄ってきた。そしてボクのことを抱きしめ、頭を撫で始めた。

「ほとんど私必要なかつたねえ～いやあ～すごいすごい！それに！よく時枝君を釣り上げたね！それで首ちよんぱ～！いやあ～！すつごい興奮しちやつたよ!!」

「あれは反則だよ、どうやつて僕の場所がわかつたの？」

「お！噂をすれば魚が来た！」

ボクを抱きしめているうさみの横にいつの間にか時枝さんが立っていた。

「嵐山さんに返事をした時に場所を把握した」

そういうと時枝さんは呆れたような顔をした。なぜ？

「それで……それでも狙いが的確過ぎるよ、まあ迂闊に返事をしたのはこちらのミスだね。ね、嵐山さん」

「そうだな、通信ではなく大声を出したのは俺のミスだ。ほら、そう落ち込むな木虎」更に嵐山さんと木虎がブースから出てきていた。嵐山さんはガックリと落ち込んでいる木虎を励ましていた。

「…………だからといって、私は何も出来ませんでした…………佐鳥先輩みたいに…………」

「木虎ちゃん俺の事もディスつてるからね!?」

そして佐鳥さん木虎は軽く口喧嘩を初めてしまった。言い争っている二人を放置して、嵐山さんはボクに近づいてきた。

「白夢白堊さんだつたね、すごいね、まだ13か14位だろう?どうやつてそんなに強くなつたんだい?」

嵐山さんはどうやつて強くなつたかを聞いてきた。以前なら素直を答えていたけど、リンドウからはシナリオを貰っていた。それとボクは17だ。

「…………小南と一緒に遊んでたら強くなつてた。あと、ボクは17歳だよ」

「なるほど桐絵とかあ…………ん? 17? 桐絵と同い年…………君まさか! は、ハクちゃんなの…………か…………?」

ボクが17だと何かを思い出したように肩を掴んできた。ボクの呼び方といい、もしかして過去のボクを知っているの?

うさみがボクの肩を掴む嵐山さんを引き剥がし、真剣な表情で嵐山さんを落ち着かせ

る。

「嵐山君、待つて」

「うさみ！この娘は……！」

「今日、玉泊に来て」

「…………こでは、言えないのか？」

察してくれたのか嵐山さんはボクを離してくれた。うさみはボクの手を取り、その場を離れた。うさみに手を引かれている時、嵐山さんを横目で見ると、やるせない顔をしていた。

「…………ごめんハクちゃん。とりあえず玉泊に帰ろう。小南と林藤さんにも相談しないきやいけないから」

「わかつた。でもうさみ、ボクは嵐山さんが過去の白夢白堊を知っているなら、真実を言うべきだと思う。嵐山さんは、知る権利がある」

「…………」

ボクとうさみはリンドウを捕まえ、うさみがリンドウに事情を話した。リンドウと車に乗り、玉泊に戻った。戻つていてる最中はうさみも、リンドウも喋らなかつた。でも、うさみはずつとボクの手を握つていた。玉泊に帰ると、小南が出迎えてくれた。

「あー！ハク！何で置いてつたのよ！宇佐美もボスも！って、どうしたの？そんな顔

して……」

「……小南、少し話がある」

「うえ？ど、どうしたの本当に、もしかして何かあつたの？」

「……」

「??」

小南は？マークを頭に浮かべながらリンドウと共にリビングに向かつた。ボクも行こうとすると、ずつとうさみに手を握られていて動けなかつた。

「うさみ？」

「……ハクちゃん、ハクちゃんが嵐山君に正直に話したいのは尊重したい、けどね、真実だけを伝えるのが正しいことじやないの……」

うさみはそういうとボクの手を離して先にリビングへ向かつた。

ボクはうさみの背中を見ながら、うさみに言われたことを考えていた。

——真実だけを伝えるのが正しいことじやないの——

うさみの言葉が頭の中で繰り返されていた。

リビングへ行くとリンドウ達はソファーに座っていた。ボクはいつも通り、小南の隣に座っていた。小南はまだ何も話されていないのか、まだ？マークを浮かべていた。そして、いつも通りボクを抱き抱えた。すると、リンドウがやつと口を開いた。

「……小南、今日、嵐山が玉狹にくる。ハクについてだ」

「え…そ、それって！」

「嵐山君はハクちゃんを思い出して、気づいたみたい」

「そつか……准も、一緒に探してたからね……」

小南は上を向き、しみじみと言い放つた。

「小南、俺は、ハクの過去を嵐山に伝えるかは、小南とハクに任せたいと思つている」「…………私も、そう思うよ。私は、部外者だから、でもハクちゃん、さつき言つたこと、忘れないでね」

「え？ ちよ、ちょっと！」

リンドウとうさみはそれだけ言つてリビングから出ていつてしまつた。小南は困つたような声をあげてリンドウ達を引き留めようとしたが駄目だつた。

「はあ……ハク、ハクはどうしたいの？」

「ボク？ ボクは……」

「真実だけを伝えるのが正しいことじゃないの——」

「……ボクは……わからない…」

「わからない?」

うさみの言葉がぐるぐるぐるぐる回つて、よくわからない……ボクは、嵐山さんが前の白夢白聖を知っているなら、伝えるべきだと思う……でも、うさみは……

「……ハク、うさみに何を言われたの?」

「……うさみは、真実だけを伝えるのが正しいことじゃないのって、ボクは伝えるべきだと思ってた。でも、正しいのか、わからなくなつて……」

「そう、ならあたしの考えを言うわ。わたしは准に伝えるべきだと思うわ」

「……え?」

ボクが迷つていると、小南は当たり前のように伝えるべきだと言つた。

「確かにうさみの言うことも正しいわ。でもね、准は12年前の白聖しか知らないの。今ハクのことは全く知らない」

「だから、あたしは、今のハクを准に知つてほしいの」

小南の言葉を聞いて、ストン、と何かが落ちた音がした気がした。

ああ……そつか、ボクは、今のボクを、嵐山さんに伝えたかつたんだ。

「……ありがと、小南、ボク、わかつたよ。ボクも、嵐山さんにボクを知つてほしい。

だから、全部、伝えたい」

ボクが伝えると、小南はニコッと笑つて強く抱きしめてくれた。

「——わかつたわ。それがハクの答えなら、あたしも手伝うわ」

そして、答えが決まつたボクと小南は答えを伝えるためにリンドウの部屋に向かつた。リンドウの部屋にはうさみもいた。うさみは何か紙を整えていた。

「あゝあ、やっぱそうだよなあ宇佐美」

「まあ、ハクちゃんと小南だからねえ」

「へ？ どういうこと？」

「リンドウ？」

結構な覚悟を決めて来たボクと小南はいつも通りのリンドウとうさみのいつも通りな態度に拍子抜けしてしまつた。

「わかつてたよ。お前らの答えなんて」

「はい、これハクちゃんの資料だよ。嵐山君がきたらこれを渡してね」

「え、あ、うん」

「…………うさみ、その、」

「良いんだよハクちゃん。それがハクちゃんの答えなんだから」

「…………うん、ボクは、今のボクを嵐山さんに知つてほしいから」

嵐山さん用の資料が渡されてからはリンドウとうさみはいつも通りになつた。そしていつも通りに夕暮れまで過ごしていた。

今日はレイジさんが料理当番だったから沢山の餃子を作つていた。あまりにも多くて、焼き肉みたいに焼きながら食べた。

レイジさんは焼くのが上手で、別のプレートで羽根つき餃子を作つていた。小南は羽根つきの方が好きなのか羽根つきばかりを食べていて。まあボクも羽根のパリパリ感が好きでそつちを食べていた。それをみた烏丸さんが

「小南先輩、餃子の羽つて実は癌の元になるらしいですよ」

「うえ!? そうなの?! は、ハク! 羽根たべちゃだめえッ!!」

といつも通り嘘をついて遊んでいた。それを聞いた小南は信じて驚いていた。
烏丸さん。小南で遊ぶのは良いよ? だけどさ……

「もう羽根食べないで〜!!」

小南は羽根つき餃子を食べるボクの肩を掴んでガツクンガツクン揺らしてきた。ボクにまで被害くるんだよね……あ、ちょっと気持ち悪くなつてきた……

「う……おえ……」

「ちょちょ!? 小南!? ハクちゃん離して!?」

「だつて癌に!!」

ボクがえずくとうさみ気づいて小南を引き剥がしてくれた。ありがとううさみ……もうちよつとで吐きそうちだつた……小南はまだ信じてるのかうさみと言いあつていた。うさみもちよつと楽しんでるよね? ちよつとニヤついてるもんね?

ボクが烏丸さんをジロツと睨むと烏丸さんは肩を竦めた。やつとバラす気になつたらしい。

「小南先輩、嘘ですよ」

「……え?」

「だから嘘です」

「だ、だましたなあああ!? 葉もわかつてたでしょ! ……ハツ! ハク! ゴメン! 大丈夫! ?」

小南はさつきボクが揺すられて吐きそうになつたことを思い出したのか、ボクに手を合わせて謝つてきた。……すこしからかつてみようかな?

「…………ゆるさない」

「ええ!」(; 。 ; Δ 。 ; ;)

「嘘だよ」

「（――。ア。）」

ゆるさないと言つたらこの世の終わりみたいな顔をして固まつてしまつた。すぐに嘘だと言つてもおかしな顔をしていた。それを見て皆で笑いながら餃子を食べ終えて小南とリビングでくつろいでいた。すると扉が急に開き迅さんが帰つてきた。

「ただいま～いやあ～遅くなつちゃつた～」

「おかげり、迅さん。ご飯食べる？」

「いや、食べてきたよ。それより、お客様さんだ」

「やあ、こんばんは」

そして迅さんに連れられてきたのは嵐山さんだつた。嵐山さんは小南に抱かれてるボクを見ると、安心したような顔をした。嵐山さんが来たことに気づいたうさみが台所から出てきた。

「お、いらっしゃい嵐山君。コーヒーでいい？」

「ああ、頼む」

「りよーかい。座つて待つてね？」

「准、こつちきなさいよ」

嵐山さんは小南に誘われてボクたちの対面のソファアに座つた。嵐山さんは小南の

腕の中にいるボクをジツと見つめてきた。

どうしたんだろう？

ボクが首を傾げるとそれに気づいた小南は部屋から嵐山さん用のボクの資料を持つてくるように言ったからボクは小南から抜け出して部屋から持ってきた。

戻ってくると嵐山さんはすこし元気が無かつたような気がした。とりあえずボクは戻つて小南に渡して小南の膝に座り直した。

小南は資料を握りしめ、真剣な表情で嵐山さんは見つめた。

「ん、ありがとハク……准、本当に良いのね？」

「……ああ」

そして嵐山さんは資料を読み始めた。時折目を見開いたりしていた。一方ボクはお腹いっぱいです、小南の体温と心音がとても気持ちよくてウトウトしてしまっていた。

「ハク、ハク！ハク！准もう帰るわよ！見送りしなきや」

ウトウトしていると小南が起こしてくれた。そつか……ボクは結局寝ちゃつてたのか……嵐山さんの見送りしないと……でもまだ眠い……

ボクがまだウトウトしていると嵐山さんに頭を撫でられた。

「ははは……良いよ桐絵、俺も結構長居しちやつたからな。なあハクちゃん」

「…………んう？」

急に話しかけられて気の抜けた返事をして、眠い目をどうにか開けて嵐山さんの方を見ると、嵐山さんは優しい顔をして

「また、きて良いかい？」

「……うん、こんどは、おはなし、しよ……？」

「ああ！ いっぱい話そう！ ジヤ桐絵、俺は帰るよ」

「ええ、近いうちに来なさいよ？ あたしもハクも待ってるから」

そして嵐山さんは帰つていった。どうにか嵐山さんを見送った後、ボクは意識を手放した。

イレギュラーゲート

嵐山さんが玉砕に来てから数週間がたつた。あれから嵐山さんとお話ししたり、木虎と一対一の対戦をしたりとなかなか充実した日々を送っていた。

「じゃ、いつてきまーす」

「行つてらつしやい、小南」

制服姿の小南を玄関から見送る。小南はこうこうせい?なので、毎日行かなきや行けないとのことだつた。リンドウにハクも通つてみるか?と聞かれたけど、小南は行かないほうが良いつて言つてたから行かないことにした。

最近では夕方近くになると、こうこうの近くまで小南を迎えて行くことが日課になつてゐる。

「オッスおはよー!諸君!!」

「迅さん、おはよ」

「つて、なんだ?ハクだけか?」

迅さんが小南と入れ替わるようにリビングに入つてきた。左手にはいつものように

揚げせんべいが抱えられている。

「うん。けどボクも今日は巡回の日だからすぐ出るから迅さん一人だよ?」

「なるほど、まあ良いか。ハク、もうすこししたら面白いことが起きる。楽しみにしどけよ?」

「?」

迅さんは言いたいことだけ行つて「もつかい寝るわ」と部屋に戻つていつてしまつた。

面白いこと…………なんだろう?……考へても仕方ないか:

ふと時計を見ると巡回の時間が迫つていた。遅れても特に罰則はないけど、このまま玉狹に残ついても暇だからさつさと出ることにする。

――――――――

巡回をし続けて、いつの間にか夕方近くになつてしまつた。今日は変なことがあつた。

自動車が人と接触事故を起こしたというのに、その人は無傷で車がひしやげる。とうことがあつた。これが迅さんの面白いことなのか?つと、そろそろ小南を迎えて行く

時間だね。

早速向かおうとすると、ボーダー本部から緊急連絡が入った。
『A11地区にゲートが発生！バムスター一体が出現！白堊さんは現場に急行してください！』

「了解です」

A11か……最近、安全地区に近いところにゲートが開くことが多いな……とにかく早く処理して小南を迎えにいこう。

「トリガーオン」

「……」

到着したは良いけれど……バムスターがいない……？

「白堊から本部へ、A11地区に到着したがバムスターがいない」

『ええ!? 確かにゲート発生を確認しましたし……本部でも調査をしますので、周囲の索敵をお願いします』

「了解」

詳細なゲート発生地点の座標を貰い、その周りを調べると、明らかに建物の破片では

ないものが散らばっている。

これは……トリオンの破片……？もしかして、これがバムスター残骸？だとすると、他の隊員が倒したのか……でもここまでバラバラになるのは普通のトリガージゃない……

とりあえず、本部に写真を送つておこう。

「白堊から本部、バムスターの残骸を確認した。写真を確認してほしい」
『こちら本部、写真を確認しました。確認なんですが、白堊さんがやったのでは無いのですね？』

「はい、ボクが発見した時にはすでにこうなっていました。近くの他の隊員が倒したにしても、破片から見ると切断やメテオラの攻撃ではこうはならない。それも、ボクのトリガーで内部から破裂させるか、圧倒的なパワーで叩き潰すかの二択です。当然ボクはやってないので、後者になると思います」

『なるほど……了解しました。後に本部で調査をしておきます。ありがとうございます』

した

プツン、と通信が切れて静かになる。さて、やることもなくなつたし、急いで小南を迎えていこう。

バムスターの不審排除の翌日、今日は巡回もなくて、玉狹に残っていた。小南もいない、やることもない、つまり暇なんだ。トリガーの訓練をしようとしても、珍しくうさみもないから訓練もできない。ボクはパソコンの操作が苦手なんだ。

「おいハク！ そんなにごろごろしてると牛になるぞ！」

「……人は牛になれないよ、よーたろう」

それをいうなら、常に雷神丸に乗つてごろごろしてると牛になっている。

「まあそうだろうな。それもりハク！ 暇ならどうやら焼を買つてきてくれ！」

「……また、全部食べたの？」

よーたろうはどうやら焼が好きだから、よく勝手に人の分まで食べるのだ。その度にボクに証拠隠滅の為に買いにいかせるから、これが初めてじゃない。

「いや、今回はちがうぞ。いつも俺を疑うのはしつれいだ。食べようと思つたが、葉が切らしていたのを思い出してな。たが俺は今食べたいんだ!! 頼む！」

「わかった。行つてくる」

「はい、まいどあり〜」

「どうも」

どら焼を買い、店舗を出ようとすると、遠くで爆発したような音が聞こえて見てみると、土煙が上がっていた。

爆発が起きて数秒後、本部から緊急連絡が来た。

『緊急！・緊急!!三門第三中学校にイレギュラーゲートが発生!!付近の隊員は向かってください!!』

通信を聞き、店舗に戻る。店員のおばさんは戻ってきたボクを見て、少し驚いた後に

「なにか買い忘れたのかい？」と首を傾げていた。

「おばさん、すこしどら焼を預かってほしい。後で絶対に取りに来る」

「え、ええわかったよ。なにか急用か」「トリガーオン」……こりやたまげた……ボーダー隊員だつたのかい。わかつた。怪我しないよう頑張るんだよ」

おばさんに頷き、店舗を出て近くの高いビルにワイヤーアンカーを打ち込み、一気に

ワイヤーを巻き上げて上空に飛び出して本部に連絡を入れて土煙の方向に向かう。

「こちら白堊、三門第三中学校に向かいます」

『了解!! すぐに嵐山隊が合流します!』

ビルや家の屋根を全力疾走して、数分で中学校に到着した。

学校の前には大勢の生徒がいて、学校の壁にはモールモッドが一匹張り付いていた。モールモッドの横にワイヤーアンカーを打ち込んで一気に近づき、右腕から杭をコアに打ち込んで沈黙させる。

ただ、勢いと威力をつけすぎて、モールモッドと一緒に壁を破壊して校内に入り込んでしまった。……あとで小南に起こられそう……

「え、ええ!」

「ん? 誰だおまえ?」

「ん?」

ぶち破つた先にはもう一体のモールモッドと二人の生徒がいた。片方はいつか見たメガネの隊員で、もう片方はみたことのない白髪の生徒だつたけど、何故か訓練用トリガーをもつていた。

「他にネイバーは?」

「あ、えっと……多分さつきので最後です」

「了解。とにかくここは危険。外に出て」

そういうつてモールモッドから降り、外に二体のモールモッド蹴飛ばして落とすと外からは軽い悲鳴と鈍い落下音が聞こえてきた。蹴飛ばす様子を見ていたメガネ隊員が驚いたように口を開けて驚いていたけど、白髪の生徒は口笛を吹いていた。

学校の柱にワイヤーアンカーを打ち込んでワイヤーを引き出して切断し、ロープにして、二人にこれを使つて降りて貰うよう言うと、メガネ隊員は慌てた様子で頭を下げてきた。

……??何故……?

「あ、あの! 空閑……こいつがトリガーを使つたことは黙つていて貰えませんか!!」

「……話がよくわからない」

「その、僕はC級隊員ですが、こいつは隊員じゃない一般人何です。空閑は負けた僕の代わりにトリガーを使つただけで……『私が代わりに説明しよう』!?」

メガネ君がボクに説明していると、くが?の指輪から黒いトリオン兵が現れた。それに少しボクも驚いてとつさにブラストアンカーを向ける。

「……トリオン兵?」

「失礼、驚かせてしまつたね。私は多目的トリオン兵、レプリカと呼んでくれ。では手短に説明させて貰う。遊真と私は最近でネイバーから日本に來たばかりで、ボーダー隊員ではないんだ。

遊真がネイバーということが知られるのは少しばかり都合が悪い。なので、遊真が倒したトリオン兵はボーダー隊員の修が倒したことにしてほしい、ということなんだ」
 ネイバー……もしかして、最近のイレギュラーゲートは遊真達が……？いや、目立つことを恐れているならそんなことはしないはず……なら無関係……まあ、正直誰が倒したかはボクにとつてもそれほど重要ではないから良いかな。

「わかった。メガネ君……おさむ？」の倒したことに対する感想を聞いても？」
 「協力感謝する。名前を聞いても？」

「ボクは白堊、白夢白堊、だよ」

「俺は空閑遊真。よろしく白堊ちゃん」

「お、おい空閑！白堊さんは17で僕たちよりも年上だぞ！えっと、三雲修です」
 修が遊真の頭を叩きながら訂正する。ボクとしてはどうでも良いことだけど。
 「好きに呼んで良いよ。よろしく修、遊真」

繫がり

ボクが二人を連れて学校から脱出すると、修が他の学生に詰め寄られていた。対して遊真は修が倒したとするモールモッドについて身振り手振りで説明していた。

それを見て修は大袈裟すぎると言つたけど、謙虚で素晴らしいと回りの評価を高めただけだった。

まずは被害の確認だったかな

「先生、負傷者はいますか？」

「え、あ、ぜ、全員無事です。あの、貴女はボーダー隊員なんですか？」

「うん？……あ、はいこれ」

「ほ、本当にボーダー隊員：失礼しました。駆けつけてくれて感謝します」

前に小南に言われたことを思い出せて良かつた。ボクは小さくてボーダー隊員に見えないから疑われたらボーダー隊員証明書を見せれば良いって。

「嵐山隊現着した！ハクちゃん状況は!?」

ボクが状況確認をしていると学校の屋上から飛び降りてきた。

それを見ていた生徒達は盛り上がり、それぞれ感想を言い始めた。

「モールモッド2体、被害者ゼロ、全員無事」

「そうか……良かった……」

簡潔に報告すると嵐山さんは安堵した表情になつた。そう言えば一体は修が倒したことにするんだつた。

「ボクが駆けつけた時にはあのC級隊員が一体倒していたよ」

「え？ そうなのか？」

「…C級隊員の三雲修です。他の隊員を待つていたら間に合わないと思い自分の判断でやりました」

ボクが修を指を指すとこちらに寄つてきて自分で説明をしてくれた。何故か表情が暗いけど。

「そうだつたのか！ 良くやつてくれた！ 君が居てくれなかつたら犠牲者がでてたかもしれない。うちの弟と妹もこの学校だつたんだ」

「え？」

嵐山さんはそう言うと自分の弟たちに飛び掛かつていつた。抱きつかれた弟たちは嫌がつてるけど何でだろう？

「誉められたじやん良かつたな修」

「……」

いつの間にか近くに来ていた遊真が修を慰めるがまだ顔は暗いままだ。もしかして怪我を？

「修、怪我でもした？」

「む？ そうなのか？ なら早く手当てを」

「いや、違うんです。……緊急時とは言え僕は訓練生です。訓練生は許可無くトリガーを使つてはいけないので……おそらく僕はボーダーから処罰されると思います」

「……そう」

くだらない……修と遊真があそこで時間を稼いでいなかつたら間違いなく犠牲者が出ていた。なのに規定違反といつて処罰するのは……

そんなことを考えていると木虎がいきなりモールモッドをバラバラにしてた。

「私にも出来ますけど何か？」

……止まつてモールモッドを細切れにするくらい訓練生でもできると思うんだけどな……

「私は訓練用トリガーでネイバーと戦うような馬鹿なことはしません。そもそも訓練生は訓練以外でのトリガー使用は許可されていません。嵐山先輩は規定違反をした隊員を誓めるようなことをしないで下さい。ボーダーの規律を守るため、彼はルールにし

たがつて処罰されるべきです」

「たしかに規定違反だが……結果的には市民の命を救つた訳だし……」

「そうだ！」

「三雲は俺たちを助けてくれたんだぞ！」

木虎が言つたことに嵐山さんも含めて生徒たちが抗議を始めた。
確かに修はルールを破つたけど……破らざる終えない状況だつたんだから不問にしても良いと思うんだけど……

「確かに人命を救つたのは評価に値します。けれどここで彼を許せば他のC級隊員にも同じような違反をするものが現れます。そんなことが起きないように彼は処罰されるべきなのです！」

「なあ、ハクちゃんよ」

「なに？」

「なんでコイツ遅れてきたのにこんなに偉そなんだ？」

遊真がそう言うと木虎が一瞬驚いてから厳しい顔に変わつた。

「…誰よあんた」

「修とハクちゃんに助けられた人間だよ。て言うかお前、修が誉められるのが気にくわなくて突つかかってきてるんだろ？」

「なッ!? そ、そんなわけ無いでしょ!? A級の私がC級に嫉妬なんてするわけ無いじゃ
ない!」

「ふうん……お前」

「つまんない嘘つくね?」

遊真がそう言うと木虎は更に言い返そうとするが、時枝さんに止められた。

「修君の処罰を決めるのは僕たちじゃなくて本部、ほら現場検証も終わつたんだから
撤収するよ」

「それもそうだ! 今回のことはうちの隊から報告しておこう。修君は今日中に本部に
出頭するよう!!」

「は、はい!」

嵐山さんはそう言うとすぐに優しい目になつて修と握手をした。

「処罰が重くならないようにやつてみるよ。君には弟と妹を守つて貰つた恩があるか
らね……ハクちゃんもお願ひできるかな……?」

「……正直、修が足止めをしていなかつたら犠牲者が出でいました。今回犠牲者が出
なかつたのは修のおかげです。ボクもできる限りの事はしますよ」

まあやつたのは遊真だけど……でも絶対に修と遊真が動いてなかつたらボクだつて
間に合つて無かつた。木虎は真似をする隊員が出ると言つたけど、C級は一般人と変わ

らない素人……立ち向かうなんてことは絶対に出来ない。

「あ、ありがとうございます?」

「……あ、どら焼……」

おばちゃんのどこに取りに行かなきや……

―――

「おい遅いぞ白堊一体なにをしていたと言うんだ!」

「ん……」つどら焼き

玉狹に帰るとよーたろうが少しご機嫌斜めで迎えてくれた。相変わらず移動は雷神丸に任せきりだけれど。

ボクはこれから報告書を書かなきやいけないし……今は構っている暇は無いかな。

「ボクは少しやらなきやいけないことが出来たから」

「ひよーひやい」モグモグ

部屋に戻り、机に置いてあつた i Pad を操作して学校での出来事を簡潔に書き込む。

『報告書 三門第三中学校ネイバー襲撃

玉泊所属 白夢白亞

本日三門第三中学校にてイレギュラーゲートが発生。発生時付近にいたため現場に急行。

現場に到着時 C 級隊員 三雲修がモールモツド一体と交戦し撃破。

私は学校窓際に潜伏していたモールモツド一体を撃破し、後に嵐山隊も交流し、事態を収集しました。

三雲修が交戦していなければ間違いなく生徒や職員に犠牲者が出ていました。彼は違反をしたとは言え緊急時であり、三雲修が動いたことで救われた人命は多く、咄嗟に動ける判断力、行動力が高くそれに加えてモールモツド一体の撃破、この功績を踏まえて彼をボーダーから除隊することは理不尽かと思われます。

どうか寛大な処置をお願い申し上げます。

報告終了

』

「ふう……こんなものでいいか……」

作つた報告書をボーダー本部に送つて iPad の電源を落とす。
”空閑遊真”

ボクが駆けつけた時に修のトリガーでモールモッドを倒していた男子生徒。
けれどあのレプリカという自立トリオノン兵や訓練用トリガーで正確にコアを破壊する技術。間違いなく一般人ではない。

それに、わざわざ修がモールモッドを倒したことに対するならボーダー隊員でもない。
なら

「ネイバー」

ネイバーならトリトン兵を連れていること、ボーダーに目をつけられたくないこと。
これらに納得がいく。

まあどうだとしてもボクは遊真をどうこうしようと言う気は無い。遊真は大丈夫。
危険なら、ボクのサイドエフェクトが反応する筈だからね。

「ふあ……」

ベットの上でそんなことを考えていると程よく意識が睡魔に飲まれていく感覚が
襲ってきた。時計を確認すると3時過ぎでお昼寝にはちょうど良い時間帯だった。抵
抗をする気がないボクはどんどん睡魔に飲まれて行き意識を完全に手放した。

ダイメイオモイツカナイナリ

「お～いハク、ちよいと起きてくれ」

「……なに」

体を揺すられて目を覚ます。すると目の前で迅さんが揚げせんべいを食べていた。

「いや～ちょっと力を貸してほしくてさ？」

迅さんが右手で頭をかきながらおどけるように言う。それにボクのサイドエフェクトが反応した。何かある、と

ボクは体を起こして簡単に身だしなみを整える。

「……わかつた」

「サンキユーハク！じゃトリオン体になつて着いてくれ」

「トリガー・オン」

トリオン体に切り替えて迅さんについていき玉狹を出る。

「寝てるところ悪かったな、まあハクならわかつてると思うけど俺のサイド・エフェクトがハクをつれてつたほうが良い！っていうもんではな」

「こ）の前の面白いことに関係ある？」

「あるある！ ちょーある！ つと、あらあ～……」

迅さんと一緒に移動していると突然ゲートが開いてモールモツドとバムスターが出てくる。

「うつわあ～多いなあ～。ま、取り敢えずここは任せたからヨロシク！」
「…は？」

急に言われて一瞬体が固まるけど、すぐに動かして一番近くにいたバムスターに向かって爆裂杭を撃ち込んで爆発させる。回りを見てみると迅さんはいなくて、インカムから迅さんの声が聞こえてきた。

『あとで甘いものあげるから！ ヨロシク～！』

それだけ言つて通信を切られてしまつた。

迅さん……まあ報酬貰えるなら良いか。：羊羹にしてもらつて皆で食べよう。

ボクは迅さんに貰う物を決めながら淡々とネイバーを仕留め続けた。30分程でゲートから出てきたネイバーは殲滅し終わつて仕留めた数を数えていた。多分19位だ。

数え終わると同時にまたインカムに迅さんから通信が入つた。

『よつす～そつち終わつた？』

『終わった。そつちは？』

『俺も終わつたよ／あそ／だ、そのままボーダー本部まで来てくれ。城戸さんが呼んでるんだと』

「了解」

本部司令
城戸さんからの呼び出し：なんだろう？まあ行つてみればわかるかな。

そう思い、ボクはその場を後にした。

本部への直通通路が繋がつてゐる入り口を使おうと思い、入り口に向かう。ただ、この通路を使うためには自分のトリガーを入り口のスキヤナーに当てる必要があつて、両腕にトリガーを埋め込んでいるボクは一度トリオン体を解除してトリガーを取り出す必要があるため面倒だ。

「…あ」

トリガーを取り出すために腕を開くとまた血が流れてしまつた。

……やつぱり久しぶりだと血が出る……寝るときは外したりして開くことを頻繁にしたほうがやつぱり良いかも知れないね。

取り出したトリガーを持ち歩いていたハンカチで拭いてからスキヤナーに当てる機械音声が聞こえた。

トリガーを腕に戻している間に通路がちょうど開いた。

そのままハンカチで血を拭きながら扉を閉めようとすると此方に向かってくる人影が見えて閉めるのを止める。

あれは……木虎と……修と遊真？

「あ、白亜さんだつたんですね。ありがとうございます」

「良いよ。皆も本部に？」

「いえ、空閑は違います。木虎と僕だけです」

「そんじや俺はここまでだな。ハクちゃん、修をヨロシク頼みます」

遊真は何故か修達をヨロシクと言つて去つていった。

……どういうこと？

多少疑問は残つたけれど、ボク達は三人で本部に向かうことになつた。ボクは端っこで壁に寄りかかりながら到着するのを待つていると、木虎が修と会話を始めた。

「私たちが戦つている間に別のイレギュラーゲートが数ヶ所開いたそうよ。本部が別動隊を動かしたみたいだけど——白亜先輩はその帰りですか？」

「……うん。バムスターとモールモッド合わせて19体位だつた」

「そう、ですか……その、被害は……」

「なるべく被害は出さないようにしたけど、大型ネイバー^{バムスター}が出てくる以上は決して被害は小さくないよ」

「…………」

ボクが答えると修は少し悔しそうな顔をして俯いた。それを見ていた木虎は何か思うところがあつたのか昼間とは違つた目で修を見ていた。

それから木虎とは別れてボクと修は一緒に会議室へ向かつた。多分修は昼間の事についての処分が言い渡されるんだろう。

「…昼間のことについてだけど、ボクもできる限りの処分が重くならないようにやつてみたけど、あまり期待はしきりで」

ボクが急に話しかけたことにビックリしたのか、驚いた表情をしていた。

「いえ…………処罰されるとわかつていてやつたことです。それに…白亜さんはわかつていますよね？空閑が一一ネイバーつてことを」

やつぱり、か。まあだからといって何もしないけど。

「白亜さんが空閑のことを黙つていて貰えるだけで僕は大丈夫です」

「そつか……」

それからは特に会話をすることなく会議室へ向かった。そして会議室に入ると「あ？ なんでハクまでいんだ？」

リンドウに心底不思議そうに言われた。

城戸さんが呼んだんじやないの？……もしかして迅さんの独断？

「……迅さんに言われて來た」

「はあ？ 迅……なるほどなあ……城戸司令」

「……構わん……白堊、最近体調はどうだ？」

「とても快調ですよ。大丈夫です」

「そうか……無理はするな」

短い言葉だつたけれど、城戸さんなりに心配してくれたのだろう。城戸さんは顔は固いけど不器用なだけで優しい人だ。

「おいくす！ 迅悠ー！ 参上いたしました！ お、ちゃんとハクもいるな～ん？ 君は？」

「み、三雲」

「三雲君ね、俺は迅、ヨロシク～」

迅さんは修の隣に座つて適当に挨拶をした。それから城戸さんが話を始めた。最初はイレギュラーゲートについてだつたがすぐに修についての話に切り替わった。どうやらボクがネイバーを倒しているときにはまた規定違反をしたらしい。

「けどネイバーを倒したのは木虎君でしょう？」

「その木虎が！三雲君の救助活動の貢献が大きいと報告している！」

「へえ…木虎が…」

それにはボクも驚いた。だつて昼間の木虎は修を陥れようとしていたんだから。どういう心境の変化かはしらないけれど。

「それに、嵐山隊や白望君の報告によれば三門第三中学校をおそつたネイバーの2体のうち一体は三雲君が単独で撃退している。規定違反とはいえ、ここまで咄嗟に動ける隊員は貴重だ。除隊ではなくB級に昇格させて能力を発揮させるのが有用かと思われる！」

忍田さんが修を擁護してくれた。どうやらしつかりと嵐山さんとボクの報告書を呼んでくれたみたいだ。

「——ボクも同意見です。修がトリガーライフルを使つていなければ確実に死人が出ていました」

ボクも続けて修を擁護するけど、城戸さんの表情は固いままだった。

「……確かに白望隊員や本部長の意見も一理ある。が、ボーダーのルールを守れない人間は私の組織には必要ない。三雲君、もしまた同じような状況になつたら君はどうする？」

城戸さんがそういうとその場にいた全員が修に注目した。しん、と空気が貼り積めた
ような気がした。

修はしばらく考え込んでから答えを話し出した。

「それは…………目の前で人が襲われていたら、やつぱり助けに行くと思います」

「ほうら見ろ。クビで決まりだ」

「三雲君の話しはもう良いでしょう。それよりもイレギュラーゲートの被害について
です」

それから修の処遇が決まったと言わんばかりに話を進め始めた。

今回のイレギュラーゲートの被害者、被害額、鬼怒田さんによればイレギュラーゲー
トをトリオン障壁で押さえているが、48時間しか持たないらしい。

そのあいだ迅さんはずっと端末を弄つていた。

多分修のことも含めて、迅さんの予知通りに進んでいるんだろうね。

「んで、お前が呼ばれた訳だ……ハクもつれてきたってことはどうにかなるんだろう?」

「もちろんです! 実力派エリートですから! 原因を見つければ良いんでしよう?」

「ああ」

「? 迅さん?」

迅さんはボクを引き寄せながら修の後ろへと引っ張った。

「その変わりといつちやなんですが、彼の処分は俺とハクに任せてくれませんか？」

「？」

ボクも？何で？

ボクが疑問に思つていると城戸さんが迅さんを睨んでいた。

「……彼が関わっているのか」

「はい、俺のサイド・エフェクトがそういつてます」

「……白堊もか？」

「……」

城戸さんに言われて関わっているかどうかを思考する。すると、サイド・エフェクト第6感覚が反応した。

「——はい、ボクのサイド・エフェクトも反応しました」

「……そうか。なら好きにやれ。解散だ」

「城戸司令！」

「次回の会議は21時からとする」

城戸さんがそういうと今まで暗かつた会議室が一気に明るくなつた。それから迅さんが修に応援の言葉をかけると修はとても嬉そうに返事をした。

「あ、ハクはメガネ君を家まで送つてつてやつてな」

「……了解」

迅さんはそういつて鬼怒田さん達と一緒に出ていった。ボクが修に目配せをして一緒に会議室から出ようとすると三輪さんが話しかけてきた。

「ちょっとといいかな、昨日警戒区域でバラバラになっていたネイバー、あれも君がやつたのかな?あの付近で保護した中学生は君の同級生だつた。君がやつたというなら——府に落ちる」

嘘だね。ボクの6感が反応したし、それを報告したのはボクだ。……けど何でこのタイミングで?それを報告書したのはボクだというのに……

そんなことを考えているうちに修は自分がやつたといつて会議室から出ていった。それに続いてボクも会議室を出ようとした時にチラリと三輪さんを見てみたけど、明らかに何かを狙っている目だった。

——三雲 修

ボーダー本部から戻った僕はベッドの上で今日起きたことを思い出していた。

ボーダー本部で僕の処分が決まつた後、白堊さんに家まで送つて貰つた。僕は大丈夫だと言つたけど、白堊さんは「迅さんに言われたから」と頑なに折れてはくれなかつた。

白堊さんと初めて会つたのは僕が入隊した入隊式でだつた。

その日の入隊式は異様だつた。本来入隊式では新人隊員しか集まらない筈なのに、何故か正隊員も多く集まつっていたからだ。正隊員の話に聞き耳を立てると、どうやら急に集められたみたいだつた。

入隊式が始まつて終わりかけた時、急に裏から少女が出てきた。そこで白堊さんが復帰するという事を知らされた。白堊さんは第一次侵攻の時に大怪我をして今まで治療を続けていて、やつと復帰できたのだとか。

その事実に僕はこれ以上ないくらいに驚いた。白堊さんはとても小さくて、”美少女”という言葉が当てはまるような容姿だつたからだ。けどそれに似合わない両腕のソレがあつた。ソレは白堊さん専用のトリガーラしい。それから嵐山隊との模擬戦をその場にいた全隊員が見せて貰つた。

そして白堊さんは嵐山隊を一人で全滅した。白堊さんは片腕を切り落とされていてけど、それ以外は無傷だつた。一人でA級四人を倒す程の実力だつたんだ。シミユレー ション室から出てきた白堊さんを見ていると不意に目が合つた。目が合つた瞬間、僕は目を剥らしてその場を後にした。あの人は普通の人とはナニかが違う。そう感じたからだ。

そして今日、迅さんと白聖さんが言つていたことを思い出した。

『俺のサイド・エフェクトがそういうつてます』

『——はい、ボクのサイド・エフェクトも反応しました』

「サイド・エフェクト……」

『高いトリオン能力を持つ人間はトリトンが脳や感覚器官に作用して、希に超感覚を発現することがある。それがサイド・エフェクト。意味は”副作用”だ』

「副作用……」

僕はすぐに布団をかぶつて声が漏れないようにする。というかレプリカはいつからいたんだ?

「超能力、みたいなものか?」

『炎を出したり、空を飛んだりといった超常的な物ではない。あくまでも人間の能力の延長みたいな物だ』

【目を閉じてる間だけめちゃくちや耳が良くなる奴とかいたな。何百メートル先の会話をまで聞き取れるんだと】

「なるほど……迅さんがあれだけ余裕な感じなのはよっぽど強力なサイド・エフェクトを持つているんだな」

【そんな凄いサイド・エフェクトなんてあるのかなあ?】

「……空閑、お前今どこにいるんだ？」

ずっと気になつていていたけど空閑からずつとカチヤカチヤと音が鳴っていた。レンガを打ち付けたりするような音が……

【学校】

「学校!? お前、ボーダーに任せるんじやなかつたのか?」

【なんか見つかつたら教えてやるよ……つとそうだ、ハクちゃんいるじやん? ハクちゃんのトリガートて誰か他に使つてる人いるの?】

「え? いやいないと思うけど……確か、特製トリガードつた筈だ」

【ほくん・さんきゅ、じやおやすみ】

「え、ちょ——切れた:なんだつたんだ一体」

急に白聖さんのこと聞いてきたと思つたら切つて……一体なんだつたんだ?

—————空閑 遊真

『え? いやいないと思うけど……確か、特製トリガードつた筈だ』

「ほくん……さんきゅ、じやおやすみ」

俺は修の返事を待たずに通信を切つた。

まあ修だから嘘じやないだろうな。

「レプリカ、やつぱりハクちゃんつて」

「ああ、”白杭”で間違い無いだろう。彼女の体からはトリオン体以外にトリオン製金属の反応も感知していた。——あんな非人道的な処置は玄界——日本のボーダーにはそんな技術は無い」

白杭、俺がまだ近界にいる頃から仲間や親父から聞いていた名前だ。

なんでも白杭は真っ白な姿で倒された敵はほぼ全員が杭を撃ち込まれていたらしい。たまに斬られたり爆発させられたりしているのもあつたらしいけど。

とにかく白杭は強かつたらしい。戦場で小さくて白い奴を見たら簡単には手を出さない、これが親父や仲間が口癖のように言っていた言葉だ。

親父曰くまだ俺と変わらない年だって言つてたけど——その時の親父はひどい顔をしていた。

白杭が所属しているのは【奴隸国家イクセル】

イクセルは他の近界から捕まえてきた人間を使つて戦争をする国。これならまだ他の国もやつてるけど、イクセルの奴隸制度は特段酷かった。

——奴隸は使い捨て

——奴隸は人ではないモノだ

——奴隸は我が国の資源である

こんな言葉を豪語している国だつた。トリオンが多かろうが少なかろうが使い捨て、おまけに人体実験、人体改造……上げたらキリがない。本当に馬鹿で糞みたいな国だつた。まあもう無いけど。

「遊真、今日はこのくらいにしておこう」

「はいよ～つと」

白杭一一ハクちゃんといつか戦つてみたいな。

ナックル型トリガー

修送つた次の日、ボクは朝からずつと部屋のベッドでゴロゴロしていた。今日は非番なのだ。

いつもなら小南がいるけど、用事があるみたいで、暫くの間は玉狹には帰つてこない。いつも一緒にいたから変な感覚だ。

それに加えて烏丸さんもレイジさんもいないから模擬戦も出来ない。迅さんはボクが起きたら既にいなかつたから本部にでも行つたんだろうね。

今日玉狹にいるのは、うさみ、よーたろう、雷神丸とボクだけだ。とにかくやることがない。まだ朝の9時なのに……はあ……

「ハクちゃん起きてる？お、起きてるね。鬼怒田さんから荷物届いてたよ！」
「ありがと」

突然部屋にやつてきたうさみはどうやら荷物を届けに来てくれたみたいだ。

これは……空白のトリガー？なんでーーああ、そういうことか。

鬼怒田さんからの荷物には何も組み込まれていないとトリガーと手紙が入つていた。

手紙にはこのトリガーを自由に使つて構わないから何か組み込んでみて欲しいとのことだつた。暇をもて余してきたボクにはうつてつけだね。

空白のトリガーを持つて作業室に行つて作業を開始する。

組み込むのは……ナックル型で良いか。

ナックル型トリガー

ボクがまだ向こうにいた時にあつたアッシュトリガー。使つてたのは……たしか男だつた筈だ。それ以外は覚えてない。

ナックル型は文字通り殴るトリガー。起動させると腕全体がトリオンに覆われる。覆われた状態で殴ると物凄い威力が出る。バムスターくらいの固さでも一撃でバラにするほどの威力がある。

ナックル型は更にトリオンを消費することで殴つた後にもう一度殴つた衝撃を与える”インパクト”という特性がある。

インパクトは使用者の意思で自由に使用できて、時間差でも使用できる。

例えば殴り飛ばしたトリオン兵が宙を舞つている間に空中でインパクトを発動させて空中で処理、又は更に吹き飛ばす。

殴る瞬間に発動させることで倍の威力を出すこともできる。呪○廻戦の黒閃みたいな感じです

……流石にあの威力は無理かな……まああれはトラストしているのが前提のトリガード。トラストしていないこのトリガーならナックル型を再現できただけマシかな。3時間程でトリガーシステムの構築、組み込みが終わった。組み込んでみるとやつぱりこれだけで容量が無くなつた。このトリガーは今他にシールドも何も出せないトリガードだ。

両腕からトリガーを取り出してから、ナックル型トリガーを起動させる。するとイメージ通り両腕がトリートンで覆われてナックル型になつた。

そのままパソコンを弄つて訓練室の中にバムスター作り出す。ナックル型トリガーを起動していても問題なく打ち込めたから指先を動かすのには問題無いみたいだね。そのまま訓練室に入つて、ナックル型の威力を試してみるとやつぱり威力は出なかつた。せいぜいバムスターの装甲にヒビが入つてへこむくらいだつた。

そのままインパクトを試そとしたら訓練室の扉が開いた。

「よお、面白そうなの使つてるじやないか」

「レイジさん？ 今日はいらないんじや」

「まあその予定だつたんだけどな。急に暇になつたもんで来てみたらと言う感じだ」

レイジさんはやれやれとジエスチャードをしながら教えてくれた。

レイジさんがいるならこナックル型トリガードれはレイジさんの方が適任の筈だよね。

「トリガー解除」

「お? どうした?」

ボクがトリガーを解除するとレイジさんは不思議そうな顔をした。

「レイジさんがいるならレイジさんの方がこのトリガーが適任だからね。ボクがネイバー出すから」のトリガーで倒して

「お、おう」

ボクが訓練室を出てオペレーターの席についてモニターを確認すると、レイジさんがナックル型トリガーを起動させて軽く腕を振るっていた。

『まずはそのトリガーについて簡単に説明するよ。そのトリガーは見ての通りナックル型、殴るトリガーだよ』

「これハクが作ったのか?」

『鬼怒田さんからの依頼でね。それでそのトリガーは簡単に言えば殴る威力を上げるトリガー。まあやつてみた方が早い』

そういってボクはバムスターを出した。それを見たレイジさんがそのまま殴るとバムスターは吹き飛ばされた。

……適任だと思つたけどここまで適任なのか……

「これ良いな。今までスラスターを使っていたから違和感があるが……こっちの方が楽だ」

『そ、そつか……それとまだナックル型専用トリガーあるんだ。ナックルにトリオンを込めて殴つた後は追撃の衝撃を与えることができる。インパクトって言えば発動するよ』

次は少し大きめのバムスターを出した。普通サイズだとレイジさんがもの足りなさそうな気がしたから。

それを見たレイジさんはニヤリと笑つて「了解」と言つてバムスターを殴つて浮かせた。

うん。文字通り浮かせたんだよ。ふわって。

「イン・パクト」

ドゴオオオンツ!!

バムスター一瞬浮いた後にバムスターは訓練室の天井にぶち当たつて砕けた。

『……ええ……？』

「少し、やりすぎたか？」

おかしい……アツシユトリガーのトラスト1……位の威力になつてる……レイジさ

んとの相性が良すぎた？

レイジさんも少し驚いていた。レイジさんでもこんなに威力が出るとは思つてなかつたんだろう。

『……次で最後。次は殴つた瞬間にインパクトを発動させてみて。多分……さつきの数倍の威力が出る筈だからバムスターも強化するよ』

「…わかつた」

「その…すまなかつたな…トリガー壊しちまつて」

ボクはレイジさんからヒビが入つて使い物にならなくなつたトリガーを返して貰つた。

これは……直せそうに無いね。中のトリガーの回路がイカれてる。

「ま、まあ大丈夫だよ。そもそも^{日本}二つ^本一では実戦向きのトリガーじゃないからね。それにレイジさんのデータが取れてるから」

結果から言うとナックル型トリガーはショート？ オーバーヒート？ して壊れてしまつた。それとバムスターは吹き飛びはしなかつたけど、凹んだ。あの強化されたバム

スターはボーダー本部の壁と同じ硬度に匹敵していた。途中で壊れてなかつたら……考えるのはやめよう。

壊れてしまつたものは仕方ない。とりあえず鬼怒田さんには……ナックル型の構築システムとレイジさんのデータを送つておこう。鬼怒田さんならデータがあれば十分だろうし。

それから若干申し訳なさそうなレイジさんと一緒にリビングに戻つた。時計を見ると1：20分で、ずっと地下で作業していたボクはお昼ごはんを食べ損ねていたのを思い出した。するとレイジさんもまだだつたらしく、トリガーを壊してしまつたお詫びないと、外に行つた。行つたのはレイジさん行きつけの定食屋さんで凄く美味しかつた。

お店の店員さんに親子に間違えられたり、店主さんに隠し子か!!と、疑われた時のレイジさんの顔が面白かつた。だってレイジさんは21歳でボクは17歳だ。そうするとレイジさんは4歳で子供を作つたことになる。

それから少し店主さんとお話してからご飯を食べた。レイジさんは野菜炒め定食で、ボクはしようが焼き定食だつた。帰り際に店主さんから何故か飴を貰つて頭を撫でられた。

ボクが?マークを浮かべているとレイジさんがニヤニヤしながら店主さんに「こいつ

「十七だぞ」って言つたら店主さんと店員さんがびっくりしていた。

帰るついでにレイジさんと食材の買い出しをした。買い出しをしている最中に烏丸さんと会つて、定食屋さんの話をすると笑われた。

「だつてレイジさんとハクさん似てますもん。目付きとか表情が仏頂面な所とか

「……そんなに似てるか？」

「……烏丸さんが言うなら……？」

烏丸さんに言われてボクとレイジさんはお互に顔を見合させた。

似てる……かな？ 烏丸さんが言うなら似てるんだろうけど……

数秒レイジさんとお互いに顔を見合つていると烏丸さんが更に笑い始めた。

「ツッ…そう言うところですよ」

「？」

「ま、そのうちわかりますよ」

烏丸さんはバイトに行く途中だと言つて行つてしまつた。商店街の電気屋さんのテレビをふと見ると根付さんが映つていて何故かラツドの写真を持っていた。どうやらイレギュラーゲートの発生源がこのラツドだつたみたいだ。

それにしてもらツドを……少し懐かしいな。ボク達もこうやつて敵地に送られたな。

『今からボーダーによる一斉駆除が始まります。このネイバーを見たらボーダーにご連絡を!!』

「どうしたハク?……おい、大丈夫か」

「……あ、うん。少し前のこと思い出しだけだよ。ボクは前まで送られる側だつたから」

「……な、中はどうなつてるんだ?」

「中……は無いかな。あれは二つの場所に現れる。けどその二つは本当は一つだから……一番簡単に言うドアだね。部屋と部屋を繋げる一つのドア」

「なるほどなあ……」

ボクが説明をするとレイジさんはうんうんと頷きながら納得していた。
うまく説明ができてよかつた。

それからは特に何もなくてちよこちよこ話ながら玉泊に帰った。帰る頃にはもう夕方になつていて玉泊の回りの川がオレンジ色に照らされていた。

玉泊に帰つてきて買つてきた食材をボクがビニール袋から出して、レイジさんが冷蔵庫に入れていく。

二人で分担してきるとリビングのドアが急に開けられて見てみるとうさみが入つてきた。ボクのトリガーを持つて。

「おかえり～ハクちゃん。もう、トリガーを置きっぱなしにしちゃダメだよ？」

「ありがとうさみ」

すっかりトリガーを外していたのを忘れてた。

トリガーを腕に入れると今度は血が出なかつた。やつぱり頻繁に開いた方が良いんだね。

「今日はレイジさんと一緒にどこに行つてたの？」

「飯を食いに行つてついでに買い物をしてきたんだ」

レイジさんがそう言うとうさみが意外そうな顔をした。

「…俺がハクが新しく作つたトリガーを壊しちまつてな。その詫びで食いに行つたんだ」

「……落ち着いた筋肉が暴れる筋肉に……」

「……握りつぶした訳じやないぞ？」

「え、 そうなの？」

「レイジさんにボクの作つたトリガーを試して貰つてたんだよ。途中までは大丈夫だつたんだけど、最後の最後でトリガーが耐えられなかつたんだよ」

ボクが説明するとうさみはぽけつとした顔をした。なんでだろう？
そんなこんなでレイジさんがナックル型トリガーを使つている動画を見せると「やつぱり暴れる筋肉……」と言つていた。

その日の夕食はうさみのロールキャベツだつた。まる

修の覚悟

そして次の日、ボクはいつも通りの時間に目が覚めた。ベッドから降りて机に置いておいたトリガーを腕にいれてから近くに置いてあつた端末で予定を確認する。

この予定表は玉狹にいるメンバーの全員の防衛任務や巡回任務の予定、他にも烏丸さんのバイト等のプライベートの日程まで入っている。まあ迅さんは予定があろうが無かろうが自由にしているが。

「ん？」

予定表を見ていると携帯からピコーンピコーンと音がなつた。どうやら電話がかつてきたりしい。端末を机に置いて電話に出るとバリボリと何かを噛み碎く音が聞こえてきた。

「もしもし」

『んあ？ ふおしもひ？ ゴクン、悪いけど今からトリガー持つてどら焼きの所に来てく
れんじや』

「……」

電話をかけてきていたのは迅さんで、用件を言うだけ言つて切つてしまつた。私は迅

さんの行動に少し呆れながらパジャマから着替えてリビングから置いてあつたメロンパンを拝借して食べながらどら焼きのお店に向かつた。

〜〜〜

メロンパンを食べながら歩いているとあつという間にどら焼きのお店のある商店街についた。

商店街には沢山のボーダー隊員がいて路地やマンホールの下を覗いてたりしていた。所々聞いた話だとまだラツドの捕獲作戦は終わっていないらしい。

だからボクを呼んだのか……

迅さんのサイド・エフェクトは未来予知で、見た人の未来が見えるサイド・エフェクトだ。

そしてボクのサイド・エフェクトは第6感覚、高確率で当たる勘だ。

ボクと迅さんのサイド・エフェクトは相性が良すぎた。

ボクが勘で動くとそれを予知していた迅さんはそれを先読みして動くことができる。つまり、サイド・エフェクトを使っている迅さんの側にボクがいればより確実な未来が見えるのだ。

戦闘面ではボクは第6感覚で、迅さんは未来予知でお互いの動きを読んで動けるため、お互いがサポートしあい、タイミングよく攻撃に転じる事ができる。

さて、話を戻そう。今回ボクが呼ばれた理由は恐らく、ボクが勘で探した隠れているラツドを見つける未来を、迅さんが見る為だ。

「お、やつときたなハク！、いやあ～反応はあるんだけどなかなか見つかなくてなく！」

「……」

「まあまあ、ほらハクのどら焼き」

「……モグモグ」

「……確かに、えづけ、だつたかな？最近の迅さんはボクを食べ物で釣っているような事前に言つてくれればこんなことしなくとも良いのに……」

それからボクは勘にしたがつて路地裏や屋上、更に林を歩き回つて、後ろから迅さんがついてくる、というふうにしてラツド捕獲していく。勿論迅さんだけに任せるのでなく、ワイヤーアンカーで遠くに見つけたラツドを釣り上げたりして協力しあつていた。

途中で修と遊真にであつて一緒にラツドを捕まえていた。レプリカも加わったことで探知範囲が広がつて探すのがすごく楽になつた。

結局捕獲作戦は夕暮れまで続いて、結局ボク達だけでラツドを200匹近く捕獲していた。最後は木虎が仕留めたみたいでテレビで中継されていた。

それを見ていた迅さんは通信機で全隊員に終了の合図をした。

『う～しつ!! 作戦終了! 皆よくやつてくれた! おつかれさん!』

「これでもうイレギュラーゲートは開かないんですよね?』

「お～ツ! 明日からはまた平常運転だ!』

迅さんがストレッヂをしながら答えると修は安心したようにため息をついた。

「本当に間に合うとは:数の暴力は恐ろしいですね』

「それだけではないぞ遊真。迅と白堊のサイド・エフェクトの相性が良すぎたこともあつての結果だろう。あのペースで発見出来ていたなら、二日間と8時間で59・63%の確率で二人だけで全てのラツドを捕獲出来ていた可能性がある』

「いやいや、流石に無理! 流石の俺もハクもぶつ倒れるつて!!』

感嘆の声をだすレプリカに向かつて迅さんは首を振つて否定した。

それにはボクも同意見だ。ここにいる全員が居たからこそ、これだけのラツドを捕まえられたんだから。

「ボク達がペースをあげられたのはレプリカの探知と修と遊真が手伝つてくれたおかげだよ。そもそも遊真が原因を突き止めていなかつたら捕まえて無い」

「そうだぞ～お前とレプリカが原因を解明したからだ。いやあ～お前がボーダー隊員じゃないのが残念だ！表彰もののお手柄だぞ～？」

迅さんはそう言つて遊真の頭を撫でていると遊真是修を指差した。

「ならそれは修に付けといてよ。そのうち返して貰うから」

「あ、それ良いな！それならメガネ君のクビも回避出来てB級に昇格よ間違い無い！」
「……えッ？いやちよつと待つてください！僕殆ど何もしてないですよ！？」

遊真的爆弾発言に修は少し間を置いてから驚いた。まあ急に功績を譲ると言われたら誰だつてそうなる。

それから修は迅さんと遊真に抗議していたが、二人に言われて迷つていた。

「それにメガネ君は助けたい子がいるからボーダーに入つたんじやなかつたつけ？」
「ほ、僕は…」

「……ボクも修にB級に上がつてほしいよ」
「は、白堊さんまで！」

「修は迷わず人に助ける為に動ける人間だよ。それは凄いことだよ。それに助けたい子がいるなら尚更力を付けないといけない」

ボクが言いきると、修はさつきと違つた顔付きになつていた。

「――よし！迅さん！僕はB級になります！」

特訓

ラツド捕獲作戦終了後、その日の内に修はイレギュラーゲート原因解明の功績を認められてB級になつた。

B級になつた修は正式なボーダー隊員となつて、訓練用トリガーから正式トリガーを支給された。修のメイントリガーは訓練用のトリガーと同じレイガスト、サブトリガーはアステロイド、バッグワームを選んだ。

「それだけで良いのか？まだトリガーに余裕あるぞ？」

「僕には迅さんや白堊さんみたいな戦闘のセンスはありません。それにトリオン量も少ないので良いくらいです」

B級に上がれたのも空閑のおかけです。僕には戦う力がありません。なら、いざという時守れるようにしたいんです」

修は使用トリガー入力を終えたトリガーを握りしめて悔しそうに唇を噛んだ。数秒程して、ボクと迅さんを見て、深く頭を下げた。

「無理を承知でお願ひがありますッ!!僕に戦い方を教えてくれませんかッ!!」「……へえ？」

修が大きな声でそう言うと迅さんはニヤリと笑つた。
ボクとしては修に教えることはやぶさかでは無いけど。

「わりいけど俺はバスだ。実力派エリートだからな。教えたくても時間が無いんだ
わ」

迅さんはそう言うと頭を下げる修の頭をぽんぽんとしてからボクをニッコリと見た。
つまり———そう言うことなんだろうね。

「…そ…う…で「ボクは良いよ」——え？」

「よつし！じやメガネ君はハクに任せた!!」

「い、良いんですか？白堊さんだつて任務とかあるでしょう!?」

修はガバツと下げていた頭を上げてボクと迅さんを交互に見ながら困惑をしていた。
それを迅さんが更にニヤニヤしながら言葉を続ける。

「実はなくハクは本当は任務なんてしなくても良いんだよ」

「……え？」

「まだ休んでて良いって言つてんのにうちのボスに頼み込んでスケジュールに入れて
貰つてるから融通が効く。だから……明日からしつかりとやれよ？」

「は、はい!!お願ひします白堊さん!!」

「うん。宜しく修」

迅さんに終始ニヤニヤしながら説明された修はとても嬉しそうな顔をしてまたボクに頭を下げた。ボクが握手をしようと右で差し出すと優しくやり返してくれた。

「んく……お、今なら一部屋空いてる。丁度良いからこのあと一時間だけ借りるから後は頼んだぞ。善は急げ、ダメガネ君。ハク、頼んだぞ」

「了解」

「は、はい!! ありがとうございます!!」

そして迅さんは用事があると言つて別れようとしたけど——

「あ、良い忘れてたけどハクスツツツツゴイ厳しいから。ハクもやり過ぎないよう気に付けるよ?」

「……善処する」

そう言い残して去つていった迅さんは前のことを思い出したのか苦虫を潰したような顔をしていた。それを見た修は

(じ、迅さん級があんな顔をするなんて一体どんなことをしたんだ……?)

声には出さなかつたが内心はビクビクしていた。

———

それから二人で訓練室に行くと迅さんの名前で予約されている部屋見つけてタマーマーを1時間に設定して部屋に入った。

「それじや最初に修の正式なトリガーを使つた時の実力を知りたいから——モールモツドを殺れ^{倒せ}」

「——え」

ボクが殺れと言つた瞬間、修の前にはモールモツドが出現していた。修はそれに対応出来ずにモールモツドに一撃で胸を貫かれてトリオーン器官を破壊された。

修の胸を貫いたモールモツドはすぐに消えた。訓練室だからベイルアウトもせずに貫かれた胸は修復されていく。

『三雲隊員、トリオーン器官破損。続行不可』

機械音声が流れた後にボクは尻餅をついて呆けている修の近くに行き、しゃがんで声をかけた。

「トリオーン兵は合図なんかしてくれないし、待つこともしてくれない。——守りたい人がいるんだろ?」

「ツ!! もう一度お願いします!!」

次にモールモツドを出現させると今度はすぐに反応してシールド状態のレイガストを展開させるが防御を仕切れずに吹き飛ばはれてしまった。

「時間が無いから次に移る。次はボクが防御をするから攻撃しろ」「わ、わかりました!」

そしてスラスターを使って攻撃をする修をボクは動かずにシールドで受け流したり弾き返したりした。

3分程続けてから弾かれてよろけた修に足払いをかけて馬乗りになつて押さえつけると、苦しそうな声を出した。

「アステロイドは飾りか？ボクは動いていないしシールドも一枚しか出してない」「ツ！」

「アステロイドを使つてもう一度。今度は動く」

「はいツ！」

修の動きはさつきとは違つてマシになつた。レイガストをシールドで受け止めれば、アステロイドでシールドを張つていない場所に撃ち込んでくる。それを体を捻り、避け心を崩して押し倒してそのまま話を始める。

それも3分程続けてレイガストで切りかかつてきたのを避け、代わりに腕を掴んで重ト自体も飛ばすことができる。

スラスターはシールド状態でも使える。シールド状態の耐久性はとても高いから至

近距離で発動されば相手を吹き飛ばしたり攻撃を押し返せる。

アステロイドは範囲も特殊な性質もない。けど威力が高くて連射ができる。一点の集中砲火、弾幕での行動制限ができる。至近距離から広範囲に飛ばそうとすればショットガンに似た使い方ができる」

「ボクが修のトリガーの使い方の例を言うと修はハツとした表情になる。

「はい」

「スラスターは重くて小回りが効かない。ならサブトリガーの組み合わせを前提に攻撃しろ」

「次は防御。反応速度は悪くないけど体がついていけない。これはこれからの訓練や実戦で慣れるしかない。

「防御をするなら攻撃に対して角度をつけて」

「角度を、ですか？」

「角度をつければシールドにかかる威力は空中に逃げる。弾いて、受け流す。正面から受け止めて耐えるよりも、威力を逃がして、弾いて、受け流した方が確実に出来ることが広がる、シールドを長持ちさせれる。修のトリガーなら、欲張れば防御をして体制を崩させて近距離でのアステロイドの集中砲火、なんてこともできる」

そこまで言つて修の上から降りて修を引き起こす。

修の目を見てみるとやる気に満ちていた。

「残りの時間は最初と同じモールモツドとの戦闘。今度はボクが声を出しながらやつて貰う」

「ハイツ！ お願ひします!!」

「あ、あり、がとうござい……ました……」

「お疲れ様」

残り時間30分間は休み無しで修はモールモツドと戦い続けた。ボクが指示や修正点を言いながら戦闘をしていたおかげか、一時間^{最初と}前は比べ物にならないほど良い動きになっていた。——倒せたモールモツドが一体だけなのを覗けば。

……まああとは、これから訓練で地道にやっていこう……けど、

「修、ごめんなさい」

「…………え？」

「ボクはこんなやり方しか教えることが出来ない。もつどうまくやれれば」

「そんなこと無いです！ 白堊さんの教え方はとても分かりやすくて覚えやすいです。

だから、これからも指導おねがいします！」

「……うん。これからも」

そしてまたボクと修は握手をした。それから訓練室を出ると外では何処からか持つてきた椅子に座つてカフェオレを片手にバリバリと揚げせんべいを食べている迅さんがいた。

「お疲れさん、よくがんばったなメガネ君。あ、揚げせん食う？」

「……頂きます」 バリボリ

「……」 バリボリ

ボクと修が迅さんから袋ごと揚げせんべいを貰つて食べていると、迅さんが珍しく気を利かせてお茶を買つてきてくれた。ボクと修はそれを受け取つて飲み、一息つけた。「いや本当によくやつたよメガネ君。一時間前とは大違いだな！」

「み、見てたんですか!? 用事があつたんじや！」

「あゝあれ? 嘘だよ?」

「嘘!?

……嘘だつたのか……ボクもてつきり帰つたのかと思つてた…
「まあでも本当に見違えたよこれからもがんばれよ」

「!! はい!!」

「おゝしじや帰るぞハク、今日はカレーらしいからな」

「……うん」

白堊さんと迅さんが帰った後、僕もすぐに帰つて疲れた体を休ませようとベッドに横たわつた。

今日は本当にたくさんのことがあつた。ラッドの捕獲も完了させられだし、なにより白堊さんのサイド・エフェクトを知れて指導をつけて貰えることになった。

「第6 感覚……か。迅さんとの相性が良い筈だ」

——俺とハクのサイド・エフェクトが合わされば探し物なんてすぐに見つかるさ。まあ相性が良すぎるのも問題あるんだけどな——

ふと迅さんが言つていたことを思い出して記憶を遡る。

最初は何で迅さんが白堊さんの後ろをついて回つているのかわからなかつた。僕と空閑が合流してからもそれは変わらなくて、でもすぐに異変に気づいた。ラッドの捕獲ペースが異常な程に早かつたんだ。これには流石の空閑も不思議に思つたらしかつた。

『なあ、もしかしてハクちゃんつてトリオン兵の場所がわかるサイド・エフェクトもつてるの?』

『違うよ』

『ならなんでこんなにラツドの場所がわかつたみたいに動けんの？』

『僕のサイド・エフェクトは第6感覚。簡単に言えば勘だよ』

『……なるほど。迅が白堊を呼んだのは白堊の未来を先読みする為か』

『お、レプリカ正解』

聞いてみても僕は理解が出来なかつた。それからレプリカが説明をしてくれてようやく理解が出来た。

——最良の未来を手繰り寄せるサイド・エフェクトと

——未来を予知して最良の未来に導くサイド・エフェクト

理解した瞬間にもうこの二人だけで良いのではと思つてしまふほどに相性がよかつた。ピコン

「ん？ 迅さん？」

突然点滅した携帯には迅さんからメッセージが届いていた。

『おつかれさんメガネ君！

率直に聞くけど、訓練中のハクをどう感じた？』

「訓練中は……」

僕は訓練中の白堊さんを思い出しながら文字を打ち込んでいった。

『正直、とても怖かつたです。普段とは少し違う口調で、白堊さんの表情がいつもより

も感情が無いような感じがして。でも、

一アドバイスや修正点はとても的確で僕の目をしっかりと見ながら話してくれて僕なんかの為に本気でやつてくれるんだって。そう思うとすごく安心できて……変なこと言つちゃつてすみません』

僕がメッツセージを送ると暫くしてから迅さんから返信が来た。

『そつか。だいたいそれがわかつてんなら安心したよ。ほいこれ、

——ハクの連絡先だ。それとハクのスケジュールが入っているから確認しといてな。ハクから「修は学校もあるだろうから修が出来る日に予定を入れて欲しい」だと。うちのボスがもうスケジュールを変更してあるから心配するな。

因みにもうハクは寝てるから連絡しても無駄だぞ? ジヤ良い夢を見ろよ。

P S ハクは結構お前のこと気に入つてるぞ』

「ええ……」

迅さんの返信を見た僕は最後の一文で困惑した。

いや、嫌われるよりはまつたく良いんだけど……まず白堊さんのスケジュールを確認しよう

僕は一度考えを置いておいて白堊さんのスケジュールを確認していくと、白堊さんの

予定は一週間に2回になっていた。とりあえず僕は明日の午前中に予定を入れて明日直接話すことにしてその日は眠つた。

遅れてすいません……

「お、おはようございます白堊さん！」

「おはよう修」

ボクが鬼怒田さんの所に行つてから修に指定された時間に訓練室に来ると既に修がいた。修は何故か少し申し訳なさそうにしていた。

「すいません午前中に指定してしまって……迷惑じやなかつたですか？」

「大丈夫。それより修は？この後予定があるの？」

「あ、はい。この後ち：友人と会う約束があるんです」

予定表で修に指定された時間は8：00から10：30までの二時間半だつた。このあと予定があるなら前回みたいに疲れさせる訳にはいかないかな。

「そつか。なら今日はレイガストじやなくてアステロイドの訓練にしよう」

「わ、わかりました！」

そう言つてボクと修は訓練室に入つた。けど前みたいな広くて大きな訓練室じやなくて隊員同士が一対一で模擬戦闘をするような場所で、トリオン体が破壊されればペイルアウトするものだつた。

そしてフィールドを河川敷に設定して訓練室に入つたボクと修だつたがいつものトリオン体ではないことに修が疑問を浮かべていた。

「ボクのトリガーにアステロイドは無いから鬼怒田さんから借りてきたんだ。さて、今日はアステロイドの訓練だけど、覚えるのは大きく分けて2つだ」

「一つは相手の行動や攻撃を制限する目的の弾幕射撃、

「二つ目は一点集中の収束射撃だ」

「あの…弾幕はわかるんですけど、収束射撃と普通の射撃は何が違うんですか？」

「ピンポイントは複数のアステロイドを収束して撃つこと」

修によく見えるように左手で通常のアステロイドを、右手で収束射撃をして河川敷の土手を射撃すると二つの穴が出来上がり、右の穴はより深くなっていた。それを見た修は驚愕の声を漏らしていた。

それを横目に今度は両手で収束射撃でタイル張りのコンクリートをビンゴカードの様に穴を開ける。

「最終的にはこれを出来るようになつて欲しい」

「……頑張ります」

「でもまずは弾幕射撃からこっちの方が簡単——やり方は単純。細かくしたアステロイドを広範囲にばら撒く。慣れれば縦だけの弾幕、横だけの弾幕で相手の動きを

ある程度コントロールできる」

「……あの、白堊さんってなんでこんな色々なことが出来るんですか？」

「?やつていたら出来るようになつただけ、修も出来るようになるよ」

「なるほど……?」

修は半分思考を放棄したような声で返事をした。

それからの訓練時間はアドバイスをしながら射撃訓練をして、修は弾幕射撃に関してはすぐに習得できた。

けど収束射撃はまだ難しいらしく収束が甘かつたり、そもそも出来ていなかつたりした。ボクも最初から出来るとは思つて無かつたけど修は必死に覚えようとしてくれて基礎の形はもうしつかり出来るから後はひたすら練習するか実践で鍛えるだけだ。

「またボクの勝ち……ん、時間だね。修、お疲れ様」

「あ、もうですか……ありがとうございました」

訓練は途中から○?ゲームのようになつていた。ボクが通常射撃で小さい穴、修が收

東射撃で大きめの穴だ。

土手のタイル張りのコンクリートを的にしていたから見える全部のコンクリートは穴だらけ。

結果を言うとボクの全勝だ。

「あの白堊さん、その、次の訓練日のことなんですけど……本当にボクが予定を入れて大丈夫なんですか？」

「？ いつでも良いよ？ 修がスケジュールに入れて」

「わ、わかりました：では先に失礼します」

そしてボクと修は別れた。修はパタパタと小走りで訓練室を後にしてボクは鬼怒田さんに借りたトリガーを返しに行くことにした。

道中に自販機に寄つてみると珍しくココアが残っていた。何故かいつも売り切れているのに珍しいと思つて鬼怒田さんへの差し入れも含めて二つ買うと丁度売りきれになつた。

暖かいココアを二つ持つて開発室に着いて挨拶をして部屋に入つても何も反応が無くて解析室へ行くと、鬼怒田さんがボクが壊してしまったトリガー（試作ナックル型トリガー）とナックル型トリガーシステムの解析をしていた。どうやら夢中になつていてボクに気づいていないみたいだつた。

集中しているところを邪魔するのも悪いと思ってココアと借りたトリガーを置いて帰ろうかと迷っていると鬼怒田さんが急にボクがいる方を向いてきた。

「ああ白堊ちゃん！ 来てくれてたのに気づかなくて申し訳ない。トリガーを返しに来たのかね？」

「はい、それとこれココアも差し入れにと思って、ココア苦手じゃないですか？」

「ココアを差し出すと鬼怒田さんは甘いのは好きだと言つて受け取つて一口飲んでほつとため息をついていた。

「しかしよく買ったね？ いつも売りきれているというのに」

「たまたまですよ。二つ買つたら売りきれになつてしましましたし—— それよりどうですか？ そのナックル型トリガーリングの回路は、随分と集中していましたけど……変な所があつたりしました？」

すると鬼怒田さんはハツとした表情をしてからさつきまで見ていた画面をボクに見せてあるところを指差した。

「……」「……だよ！ インパクト」の回路！ こればっかりはどうもうまく理解が出来んのだ……」

鬼怒田さんはそう言うとがつくりと頭を下げて頃垂れてしまつた。

鬼怒田さんが指を指していたのは“インパクト”の発動条件と発動の仕組みについ

ての回路だつた。

確かに”インパクト“の回路は難しいけど……いや、ややこしいのかな？
「えと、インパクトの発動段階は雑に分けると、トリオン変換、マーキング、蓄積、発動です」

「マーキング：発動：トリオン変換と蓄積とは？」

「インパクトを発動させる前にはトリオンを追加する必要があります。そのトリオンは殴つた衝撃を蓄積するトリオンに変換されるんです。最初にそのトリオンを作り、殴つた場所に付着してから発動、となります」

インパクトの回路説明をしている間鬼怒田さん顎に手を当てながら真剣に聞いてくれていた。説明を終えた後にすこしづづと呟いてからボクの目をしつかりと捉えた。

「——インパクトは任意発動ではなく自動発動ではダメなのかね？」

「それは……トラストされていれば良いんですけど、普通のトリガージャー：トリガー 자체が耐えられないと思います。その、最後のレイジさんみたいに……」

「……なるほど、確かにあれではなあ……」

レイジさんが最後にノータイムでインパクトを発動させた後の事を思い出して鬼怒田さんと一緒に天井を見上げる。

……やっぱりレイジさんのナックル型トリガーの適性はおかしいよね……

爆裂四散するトリオン兵を思い出していると、鬼怒田さんは壊れたトリガーを持つていた。トリガーはひび割れて黒ずんでいた。

「……つまり、トリガー本体が衝撃に耐えられずにオーバーヒートすると言うことか……」

鬼怒田さんは壊れたトリガーを上に掲げながらそう呟いた。

「まあそれはこちら側の問題だ。ありがとう、白堊ちゃん」

「？」

「白堊ちゃんがこう言つた技術を教えてくれるから我々ボーダーもさらに強化でき

る」

鬼怒田さんはニカツと笑つて言つてくれた。

みたされて

放送で緊急の召集がかけられて鬼怒田さんと共に会議室に行くと、すでにボーダーの幹部が集まっていた。

リンドウはヨツとボクに片手を上げて挨拶をした。前にリンドウから教えて貰った通りに真似をして返すとリンドウ以外の面々がポカーンとしていた。

それにしても、何故ボクも呼ばれたのだろうか？

そんな事を考えていると、どうやらまだ時間があるようで鬼怒田さんが召集がかけられる前の説明途中だつたトリガー回路について聞いてきたため、それに答えていると会議室の扉が開いた。

入ってきたのは迅さんと修で、迅さんはボクを見てニヤツとしていて、反対に修はとても驚いた顔をしていた。

待ち人は迅さんと修だつたようで鬼怒田さんは自分の席に戻り、リンドウはボクに迅さんの隣にたつているように言った。

「揃つたようだな。では迅、報告を」

「はい、では先ほど三輪隊と交戦したネイバーは三輪隊と交戦してネイバーが勝利しました。彼は……まあ俺よりこつちのメガネ君のほうが長く付き合つて詳しいから、後はよろしくメガネ君！」

は、
はい?
わ、
わかりました!

どうやら修がいる理由は遊真についての事らしい。ネイバーつてことがばれて、みわ隊？の隊員と交戦して勝つてしまつたということだつた。しかも、遊真はブラックトリガーを持つてゐるらしい。

その報告を聞いて鬼怒田さんは怒りの混じったため息を吐いた。

「前回に続きまたお前か！ いちいち面倒な事を持つてくる奴だな？」

の信用に関わる事態だよ?」

根津さんがそういふと忍田さんが「三雲君にも考えがあつての事だろう。現にブラックトリガーを現在まで押さえていた」と庇つていた。しかし鬼怒田さんと根付さんは腑に落ちないらしく食い下がつている。

「報告をしていたらより面倒なことになつていったでしよう？ 「あ」あ！？」嗚呼、いえなんでも」

「まあまあ！少し考え方を変えてみましょーよ！」——そのプラツクトリガーが味方

になるならどうします?」

迅さんの言葉で会議室は一瞬だけ空気が止まつた。

どうやら迅さんは遊真をボーダーに入れたいみたいだ。

確かに遊真がボーダーに所属すればボーダーの戦力は一段階上がるだろうね。でも、

そんなうまくいくものかな?

「メガネ君はそのネイバーの信頼を得ています。彼を通じて説得できれば争わずに大きな戦力が手に入りますよ?」

「それは、まあそうだが……」

「そんなうまく行きますかねえ?」

実際、修がボーダーに所属していることは遊真も知っているから、ありえなくはない話だ。

そして、今まで黙っていた城戸司令が口を開いた。

「——確かにプラックトリガーは戦力になる。ならばそのネイバーを始末してプラックトリガーを回収しろ」

「なッ!?

「まあ、A級1~3位の部隊は遠征中だが、正隊員全員を使えばやれんことはないだろう」

「何を馬鹿なことを！それでは強盗と同じだ！！それにその間の防衛任務はどうするつもりだ！」

「部隊を動かす必要は無いだろう。ブラツクトリガーには、それ相応のトリガーぶつけるまでだ——迅、白堊、お前達にブラツクトリガーの捕獲を命じる」

【ブラツクトリガーの捕獲を命じる】

上からの、命令

その言葉が頭の中で反響する。

「……りようkモゴモゴ??」

命令を受諾しようとすると隣にいた迅さんがボクの口を塞いで後ろから抱き締めていた。

?どうしたんだろう??

そう思いながら見上げると迅さんは

「俺もハクもお断りさせていただきます」

命令を拒否した。

「迅、白堊、お前達にブラツクトリガーの捕獲を命じる」

城戸司令がそう言つた瞬間に隣にいるハクの気配が変わった。

玉泊にいるときは違う。冷たく、無機質で感情なんて無いようなそんな気配に。ボスがハクを見て目を見開いて椅子から立ち上がるとしているのを見て、最悪の一つの未来を引いていることを悟り、ボスにアイコンタクトで座るように伝え、ハクの口を塞いで動かないように後ろから抱き締めてその未来を反らす。

ハクは俺を見上げて不思議そうにしている。いつものハクだ。

……小南に見られたら殴られるだろうなあ……

そんな事を考えながら俺は城戸司令に言う。

「俺もハクもお断りさせていただきます」

俺の腕の中でハクがビクリと震える。抱き締めている腕に力を入れ直してハクを見下ろしてみると両目を見開き、俺をありえないものを見るような目で見ている。ハクがこの世界に来てから初めて見る、驚愕の表情だった。

「迅、白堊、お前達にブラツクトリガーの捕獲を命じる」

城戸司令が言つた瞬間ハクの気配が変わつた。まるで初めて俺とあつたときのような気配に。

目から光が消えていつていた。

ハク見た瞬間俺の体は動き出していて椅子から体を浮かせていた。しかし迅がハクを抱き締めて俺を睨んでいた。……そういうことかよ

俺は迅に任せることにして自然に椅子に座り治した。

またハクを見ると頭にいくつもの？マークを浮かべたハクが迅を見上げていた。そして、迅が命令を断るとハクは目を見開いている。

頼んだぞ迅

「ネイバーに拐わられた人はネイバーの戦争に使われるって言つてたでしょ？それってどんな風に使われるの？」

こじんまりとした神社でハンバーガーを食べている遊真に千佳が質問した。

遊真是咀嚼していたハンバーガーを飲み込んでから一瞬だけ考える素振りを見せてから話始めた。

「それは拐われた国によるかな」

遊真的解答に疑問符を浮かべる千佳に遊真是再びハンバーガーを食べながら続きを話し始める。

「ネイバーにも、いほいひよなスタイルがあるんだよ。こつちの世界に来ているネイバーも実は別々の国から来ていたりする。その国が勝ってるか負けているか、兵隊を鍛える余裕があるか、司令官が使える奴か使えない奴か、まあそんな事情で話は変わるけど、トリオン能力が高い奴は貴重だから、ほとんどの場合は戦力として大事にされると

思うよ？千佳とかちょく大事にされるかも！」

「じ、じゃあ…拐われた人も生きてるかもって事!?」

千佳が遊真的解答に期待を膨らませながら言うと、遊真是一瞬だけ言い淀んだ。

「普通にある……いやどうかな…運が良ければ十分に言えるんだけど、すまん。断言

はできない」

「そ、そつか…そうだよね…」

「何？知り合いで拐われた？」

遊真の質問に千佳は気になつただけ、なんでもないと取り繕つて返事をした。
それに遊真は口を尖らせて不満そうにした。

「お前、つまんない嘘つくね」

「「ツふえ!?

「こつちにだけ喋らせてそつちは秘密か、まあいいや後で修に聞く」

「ふえツ!? 待つて待つて!ごめん!」

千佳は不満そうにしている遊真に謝罪をして、一度仕切り直すために神社の鈴をならして手を合わせる。

「……本当は、そうなの。ネイバーに拐われたの。小学校の時仲良くしてくれた友達と兄さん。一人が拐われたのは私のせいなの。私が相談なんてしたから……」

落ち込んだように顔を伏せながら千佳はそういつた。それに遊真は納得が言つたようしている。

「なるほどねえ、だからもう他の人を頼りたくないって言つてたのか。ボーダーとか

も」

「……うん。だつて迷惑かけたくないから」

「ま、気持ちはわからんでも無いけどなあ」

「え?」

遊真はその場で体を倒し、「俺だつて今日修と千佳を巻き込んだ」と神社の天井を見上げながら言つた。そんな遊真に對して千佳は笑顔でそれを否定した。

「そんなことないよ！修君はそんなこと気にしてない。自分の意思でやつたことだ。お前が気にすることじゃない」

手を目に当てて修のメガネの真似をしながらそう言つて、千佳は多分、と付け加えた。遊真も確かに言いそうと納得した。

「あいつは他人の心配と自分の心配のバランスが可笑しいからな」

「うん！学校にネイバーが出たときも真っ先に皆を守ろうとしたよね。修君つていつも自分以外の誰かを心配してゐる気がする」

遊真是食べ終わつたハンバーガーの包みを袋に入れて千佳の言葉に同意した。

「そもそも俺を心配する必要はなんか無いのに」

「え、でもボーダーの人に遊真君狙われてるんでしよう？」

「俺とレプリカが本氣でやれば負けることは無いよ。……いや一人、いや二人いるな」

遊真是ぐしやりと紙袋を漬しながら言つた。

「迅さんとハクちゃん」

「迅さんが：おでこにサングラスしてる人で、ハクちゃんつてたしか……修君が特訓して貰つてる白堊さん？」

「そうそう、千佳はハクちゃんに会つたこと無かつたな。迅さんは多分相当強い。勝てるかどうかはやつてみなきやわからないけど、ハクちゃんには……2割つて所かな？ 勝つたとしても俺は無事じやないけどね」

「じ、じやあ！ 迅さんも白聖さんが追つてになつたら！」

「……ま、逃げ切れれば上出来だな、ま、そんなことにはならないよ」

心臓の音が煩いくらいに大きくなつていく
身体が震える

寒ほ
い

わたしは お前らは

命令は、ゼッタイ

逆らうな

めいれいには逆らえないと

従え

サカラツテハイケナイ 貴様らは道具だ
メイレイ違反ハ廃棄対象 使えない道具は処分するだけだ

「俺とハクは玉狛支部の人間です。城戸司令に直接の司令権限はありませんよ？俺とハクを使いたいなら、リンドウ支部長を通してください」

「…………」

迅さんに強く抱き締められてハツとする。

そうだ、ボクは、リンドウの

離^捨
れ^{ねえ}
ねえよ。俺^玉_狛^はたちは家族だからよ』

いつの日か、リンドウに言われたことを思い出すと、

ボクの心臓の音は小さくなつていつて迅さん的心臓の音が聞こえた。

抱き締められて震えが止まつた。

迅さんが、暖めてくれている。

「やれやれ：支部長命令だ！迅！ハク！ブラックトリガーを捕らえてこい！」

「はい」

「了解」

「ただし！やり方はお前らに任せる

「了解ボス！必ず命令を遂行します！」

「了解、ボス

ボスの命令は、絶対

『命令じやねえお願ひだ』
『嫌ならやらんでいいぞ』

家族は離れない

初めて胸の奥が熱くなつた。

初めて命令を受けたいと思つた。

「ほら行くぞハク、ボスの命令だからな」

「…うん」

迅さんに手を引かれて会議室を出る瞬間、ボスと目が合つて、応援してくれてるような気がして、どうしようもなく、うれしかつた。

音

「あ、メガネ君置いてきちゃった、ちょっと待つててな」

そう言つて迅さんは再び会議室へ戻つた。通路の端により、胸に手を当てて目を閉じる。

俺たちは家族だからよ

ボスの言葉を思い出すと胸の奥がじわじわと熱を持つた。とても心地良くて、同時に恐怖を感じた。

この熱を失いたくない。だから、うさみも小南も、ボスもレイジさんも鳥丸さんも、迅さんも、玉狹^{家族}を守る。絶対に。

「メガネ君薄々わかつてるとと思うけど、今のボーダーは3つの派閥に割れてるんだよねえ」

「派閥、ですか？」

「そ、ネイバーに恨みがある【ネイバーを許さない】城戸さん派、ネイバーに恨みは無いけど【町の平和が第一】の忍田さん派、そして」

迅さんはボクの後ろにまわって腕を掴んでピースサインをさせてきた。

「ネイバーにも良いやつはいるから【仲良くしようぜ】我ら玉砕支部！」

「は、はあ…」

修は迅さんの行動に驚いたようだつた。

まあ迅さんの奇行は今さらだからボクは慣れた。

「聞いての通り城戸さん派と俺達は正反対だからあまり仲がよろしないわけ、城戸さんの派閥は一番大きいからうちが何かやつても王者の余裕で見逃して貰えてたけど、遊真と手を組んだら派閥のパワーバランスが完全に崩れる」

迅さんがそう言うと修は空閑が入つただけで?!と驚いていた。

「まあ実際は少し前から殆ど崩れかけてたけどな、それも相まってブラックトリガーつてのが後押しだ。まあそんなわけで、城戸さんは何かしらの手を使つてブラックトリガーを奪いに来るだろくな、あ、遊真達と合流したいから連絡して貰える?場所

は……商店街で

迅さんはボクの背中を押して歩き始めた。

「…ハクさんと迅さんって仲が良いんだな…」

ボーダー本部を後にし、商店街へ向かうと遊真達は既に商店街の入り口にいると連絡が入り、入り口に向かうと自転車を押している遊真と女の子がいた。

修に聞いてみると修の友達の雨取千佳というらしい。

「あれ、ハクちゃんじやん？久しぶり」

「久しぶり遊真」

「は、初めまして、雨取千佳です」

「初めましてボクは白夢白堊、ハクって呼んで」

千佳と軽く自己紹介をして何やら考えながら歩き始めた迅さんの後をついていく。

その間は遊真が修に本部での事を聞いていた。

「ボーダーがお前のトリガーを狙つてくるかもしないんだ」

「ほう？」

「迅さん、白堊さん、これから僕達はどうしたら良いですか？」

「どうしたらいいか……それは、

「……襲われたら撃退する？」

「ん……それもありっちゃあアリだけど、もつとシンプルにいこう、遊真お前ボーダーに入らない？」

迅さんがそう言うと遊真は呆然として、修は抗議を始めた。

でも迅さんが言うには本部のボーダー隊員じやなくて、玉柏支部のボーダー隊員にならないかと言うことらしい。

悩む様子を見せる遊真に迅さんはお試しで来てみたらどうかと交渉すると条件付きで了承した。

「ん……修と千佳が一緒なら良いよ？」

「うし、決まりだな」

玉柏支部に向かう途中遊真と千佳から今朝あつたことを聞いていた。修と別れた後に千佳と合流しようとしているとバンダードラムに襲われている千佳と遊真を修が助けたら

しい。

「前よりすごい良い動きしてたよホント」

「多分白堊さんの特訓の直後だからだよ…もつと、頑張らないと」

「まあまあ、そんなに卑下にすることないぞメガネ君、ほら着いたぞ、ここが我らが

ボーダー、玉狹支部だ」

迅さんがそう言うと修達は回りをキヨロキヨロと見回して橋から川を見下ろしていった。

「元々ここは川の水質やら何かを調べる施設で、使われなくなつたのを買い取つて基地にしたんだ、良いだろ？」

「は、はあ…」

そして玉狹に入ると玄関には何故かよーたろうが雷神丸に乗つて出迎えた。まあ、偶然だろうけど。

修達は雷神丸を見て驚いているのか硬直していた。

「陽太郎、今誰かいる？」

「……新入りか？ウグツ！」

初対面で失礼なことを言うよーたろうに迅さんが手刀を食らわせると大袈裟に身をすくめた。すると奥からうさみの声がした。

「迅さんお帰り～あ、ハクちゃんもお帰り～」

「うさみ、ただいま」

うさみは段ボールを抱えていて、何かの整理をしていたみたいだつた。迅さんが修達にうさみを紹介するとうさみはやつと修達に気づいたみたいで慌てて準備をしに行つた。

「ムフツ！」

「ん……」

雷神丸が構えと言うように鼻で小突いてきた。しゃがみこんで頬を揉むように撫でるとまたムフンと鼻息を鳴らした。

それから修達を客間に案内して迅さんと一緒に部屋に戻つた。

「何で遊真を誘つたの？」

「何でつて、遊真をうちに引き込めればブラックトリガーの確保っていう命令も達成できるし、うちの隊員になればボスも俺も遊真を大胆に庇えるからな——揚げ煎食う

？」

ボクが納得した所で迅さんは積み上げられてる段ボールから揚げ煎餅を新しく取り出でてバリバリと食べ始めた。……夕飯が近いのに

「うさみに怒られるよ？」

「バレなきや良いんだよ 「むぐ…」

迅さんはボクの口に揚げ煎餅を無理やり入れてきた。

吐き出す訳にもいかずに食べるとこれで共犯だとニヤリと笑つた。

「む」

ガチャリとドアが開けられるとそこには遊真がいた。

「お～遊真、揚げ煎食うか？」

「ちょっと駄目ですよ夕飯前なのに！」

「あ、あはは…」

迅さんがうさみに怒られている間に遊真がヒヨイと部屋を覗き込んでボクと目が合つてバタンとドアを閉めた。

するとうさみがいなくなつた瞬間にまた揚げ煎餅を食べ始めようとする迅さんから揚げ煎餅を奪い取る。

「俺の揚げ煎が…」

「だめ、うさみに言われたでしょ」

「とほほ…」

大袈裟に肩を落とすとおもむろにスマホを取り出して何処かへ連絡を始めた。

「　　はい、Lを2つを夕方過ぎた頃に、それじやお願ひしま～す♪」

「何か頼んだの?」

「ピザをな、俺のサイド・エフェクトが今日の夕飯は完成しないと言つてるからな。あ、皆には内緒だぞ?」

「ぴざ?」

「お? そういうやハクはまだ食べたこと無かつたか、うまいから楽しみにしとけよ」

たしか昨日のカレーが残つてた筈だけど……また雷神丸が食べたのかな?
以前も夜に雷神丸が前日残つていたカレーを全て食べるという事件が起きた。その
時は小南が怒つて大変だつた。

「そんじや俺は暫く寝るから夕方になつたら起こしてくれ」

「了解」

迅さんはベッドに横になるとサングラスをかけて寝始める。

……この開いた揚げ煎餅はリビングに置いておけばよーたろうか雷神丸辺りが食べ
るかな。

迅さんの部屋を後にしてリビングに揚げ煎餅を置いて自室に戻り部屋着に着替ながらトリガー抜いてベッドに座る。

やることが無いからどうしようかと考えていると前に烏丸さんから貰つたミルクパ
ズルが目に入った。

「……やつてみようかな」

箱をあけると中には袋に入った真っ白なピースと説明書、そしてピースをはめる板と組立式の箱が入っていた。

板はかなりの大きさで説明書には大きなテーブルか床でやるようになると書かれている。

説明書通りに床に板を設置してボク自身も手前に座り込み、まずは箱を組み立てる。暫くしてできたのは幾つかの区切りのある底が浅くて広い箱だつた。

説明書によるとこの区切りごとにピースを分類してから始めるらしい。

「……まずは一番大きなスペースにピースを全て入れ、角や平面があるパズルの輪郭のピースを分類しましょう…」

ザラザラと音をたてながら袋からピースを箱に移して目的のピースを探す。数十分程で分類が終わり、説明書に書いてある準備が終わつた。

「分類が終わつたら準備は完了です。後は思うままにピースを繋げましょう。パズルを休憩する場合は付属のクリアケースを被せて保管してください……」

説明書を箱に入れ、早速ピースを板に嵌める。最初は4つの角に90°のピースを嵌め、そこからピースを繋げていく。

回りを嵌め終え、いざ内側のピースに取りかかる。

「……なかなか、うまくいかない……これ？」

嵌まりそうで、うまく嵌まらない。かと思えば別の場所で綺麗に嵌まる。

それから時折首を傾げ、ピースを見つめながら淡々とパズルを嵌めていく。

パズルの2／6程ができた所で遠くから夕方の放送が聞こえて窓を見るとオレンジ色に染まっていた。

パズルにクリアケースを被せ、迅さんを起こしに行くとベッドの上で寝始めた体勢と全く変わらない迅さんが寝ていた。

体をユサユサと揺さぶりながら声をかけても呻き声を上げるだけで起きてはくれない。

「ううん…たしか、小南とうさみがこうしてたような…？」

寝ている迅さんのお腹に手を置き、徐々に力を込めていく。すると迅さんは苦しそうな声を出し、目をしょぼしょぼさせながら起き上がった。

「ヴォエ……おはようハク……」

「おはよう迅さん、夕方だよ」

「みたいだなッ！あ”＼……」

体を伸ばすと背骨がなる音が聞こえた。ボクも真似をしてみるが、埋め込まれた背骨

のトリオン金属が力チカチと鳴るだけで迅さんの様な音はならなかつた。

「……その音どこから出してんの？」

「？背中」

「ほえ？…こうなつてんのか」

背中を捲つて見せるとペタペタと触られる。背骨のトリオン金属を上下に撫でると捲つていた服を下ろされた。

「さ、もうじきピザが：お、来たか。んじゃ、リビングに行くか、そういういえば俺が起きるまで何してたんだ？」

「烏丸さんに貰つたミルクパズルをやつてた。難しくて2／6位しか完成してないけれど」

「いや、十分だと思うぞ？たしかあれ1500ピースだつた筈…」

話しながら進んでいると、リビングの入り口に人影が見えた。あの人人がピザの配達員みたいで、何故かうさみ達はリビングの角で一塊になつていた。

ピザを受け取りながら聞いてみると、侵入者用のセンサーが反応して、ボクも迅さんも連絡がつかなかつたから警戒していたみたいだった。

そして全員でテーブルを囲んでピザを食べ始めた。

迅さんからピザを受け取ると、ピザは三角形で薄くて、表面には黄色い何かとケチャップが掛かっていた。

前に、烏丸さんがくれたものと似てる？

「……パン？」

「んく、だいたい材料は一緒だな。でも味は別物だから冷めないうちに食えよ」「んむ……ツ!?」

ぱくりと一口食べると食べたところから黄色い何かが伸びてソレが口とピザを繋ぐ。思わず驚いて体を硬直させていると横から光とパシャリという音が鳴った。

「え、迅さん何で写真取つてるの?」

「いや、ハクの驚いた顔はウルトラレアだからな、ほら」

迅さんがうさみに写真を見せるとボクと見比べて確かに!と感心していた。顔に出たかな?

とりあえずもちやもちやとのびているものを食べ、水で流し込む。

「あれ、何?」

「チーズって言つてな、アイスと同じような牛乳が材料だ」

「牛乳が伸びる……? 何故……?」

……牛乳は飲み物で液体で、アイスは食べ物で、チーズは食べ物で、伸びて……

液体……? 個体……?

「あ、こら陽太郎! なにしてんの!」

「ふつふつふ、ハクにも大人の味を知るが良い!」

「…ハクちゃん、健闘を祈る！」

食べかけのピザを見てみると、よーたろうが何かケチャップ？の様なものをかけたみたいでピザの白い部分が赤くなっていた。

遊真は何故か水を沢山飲みながら敬礼をしている。

とりあえず食べてみると、さつきと変わらない味だった。

「あッ！ハクちゃん大丈夫！？水水！つて、大丈夫なの？」

「？」

「なん……だと…！？」

どうやらさつきの赤いのはホットソースで、辛味を追加する調味料らしい。……辛味つて、どんな味なんだろう？

そんな事を考えていると着信音が鳴った。着信があつたのは迅さんで、相手はボスだつた。

着信の内容は、ボスが修と遊真に会いたいという理由だつた。

ボスが帰ってきて、迅さんが修と遊真を案内するのについていこうとしたら迅さん一人で十分だと言われた。

「今日は遊真達も泊まる予定だから、少し早いけど風呂の準備をしといてくれるか？」
「……わかった」

手早くお風呂を掃除して、お湯を貯める。暫くするとお湯が湯船に貯まりきったようで音楽が流れた。

それをうさみと千佳に知らせに行くと千佳は遊真達と話しているみたいでうさみしかしなかつた。

「あ～そつか、それじや千佳ちゃんが帰つてきたら一緒に入りに行こつか」「いいの？」

聞き返すとうさみは一瞬硬直して「あ…」と声を漏らした。

ボクの体には首輪は勿論、至るところにトリオン金属が埋め込まれていて、様々な傷跡がある。

普段から人に見られない為に肌を露出しないように長ズボンや、首まであるセーラーを来ている。

「あ～そつか、そだつた……それじやあ：先に一人で入つて貰つていい？お風呂あがつたら私と千佳ちゃんが入るからさ」

「わかった」

服を全て脱いで浴室に入り、髪を洗う。

—— そういえば、最初の頃は小南かうさみに洗つて貰つてたな……
 そもそも入浴なんてこつちに来る前はしたことが無かつた。だいたいは浄化液のシャワーで返り血や汚れを落とすだけだつた。

浴室といえば、ボクが使われる場所で、ボクの身体を擦り付けて洗う場所だと思つていて、小南とうさみを困らせてしまつたこともあつた。
 教えて貰つた通りに髪をしやこしやこと泡立てた泡で丁寧に洗い、流した後にリンスを付ける。その後に顔を洗つて身体を洗う。

そして背中を擦つているとビリッと音がした。見てみると擦つていた布が背中の突出しているトリオン金属に引っ掛けつて破れてしまつていた。それに、鏡で見るとトリオン金属の隙間に布が挟まつていた。よりによつて、指が届かない場所だつた。
 「むう……」

誰かに頼んで取つて貰わないと……背中に違和感が……

手早く髪を乾かしてリビングに戻るとうさみが本を読んでいた。

「あ、あがつたんだ」

「うん。あと、また破れちゃつて……挟まつてる」

「ありやあ：あれ結構ぼろぼろだつたからねえ：、千佳ちゃんが戻つてくる前に取つ
ちやおうか」

椅子に座つて服を捲つて身体を丸めると、背中のトリオン金属が動いて隙間ができ
た。うさみは慣れた手付きで挟まつていた布を取つてくれて違和感が無くなつた。

うさみにお礼を言つて部屋に戻つてミルクパズルの続きを少しだけして、いつも寝る
時間になつた。

ベッドに横たわると昨日よりもベッドが広い気がした。

「……あした、明日は小南が帰つてくる」

目を瞑ると何故か昼間に聞いた迅さんの心臓の音を思い出した。

小南の心臓の音は、どんな音なんだ……う……

第17話

目が覚めると同時に時計から目覚ましの音がなつた。

パジャマを脱いで着替えてリビングへ行くとボスとよーたろうが朝食をとつていた。

「おはようハク、飯できてるぞ」

「……んまあ…」

「おはようよーたろう、ボス」

新聞を読んでいるボスの向かい側に座り、用意されていた朝食を食べる。斜め前でら
よーたろうが寝ぼけながら食べているせいで雷神丸に横取りされたことにも気づかず
に口だけをもごもごさせていた。

暫くして食べ終わりボスが新聞を見ながら話をふってきた。

「そういやハク、お前鳥丸に貰ったパズルやつてるんだってな迅に聞いたよ」

「うん」

「完成したら見してくれや」

「了解」

空になつた皿とコップをシンクに持つて行つてお湯につけてテーブルに戻ろうとす

ると不意にリビングの扉が開いた。

「ただいまハク！」

「小南？」

小南に抱きつかれて視界は小南の服で一杯になつた。

それと同時に昨日みたいに胸の奥が熱を持った。

暫くそうていたが、小南が満足したみたいで離れようとした。

「ハク？」

小南が不思議そうにボクをみた。

視線はボクとあるところを交互に行き来していて、視線を追つてみると、小南の服の裾を掴んだボクの手があつた。

「……え、あ…？な、なん、で」

いつの間に？どうして？

そんな言葉が頭の中で暴れているとまた気づいたら小南に抱き締められていた。

「落ちついて、別に怒つたりしないわよ。大丈夫：大丈夫だから」

背中を優しく叩かれるといつの間にか激しくなっていたボクの心臓が落ち着いて

いって、目を閉じると小南の心臓の音が聞こえた。

それから数分が経つただろうか。

小南の胸に顔を押し付けて心臓の音を聞いていると肩を叩かれた。

「ほらハク。小南は帰つてきたばかりだからな。小南はまず荷物を置いてこい」
小南はバスの言葉に渋々従つて荷物を持つてリビングを出ていった。
ドアから出していく小南を見送つた後バスはボクの背中を押して一緒にソファーに座つた。

ソファーに座るとバスは何かあつたのかと聞いてきた。

「…いつの間にか、小南服の裾を掴んでて。最初抱かれた時に胸の奥が暑くなつて、小南が離れるときに胸が苦しくなつて、それで、なに、がなんだかわからなくて…」「…なるほどなあ」

バスはコーヒーを一口飲んでボクの頭に手を乗せてその胸の暑さが何か知つているかと聞いてきた。

「わからない、でも嫌じやない。無くなつて欲しくない…？」

「その暑さはな。喜びつてんだ。お前は小南が帰つてきて嬉しかつたんだよ」「うれしい」

「そうだ。人つてのは久しぶりに会えると嬉しくなるもんだよ。その逆に胸が苦しくなつたのは寂しかつたからだ」

ボスは頭をポンポンと叩きながら言つた。

そして近くから足音が聞こえてきた。

「寂しかつたら素直にそういうんだ。胸の奥で起こつたことは、言葉にしなきやずつとそのままだ。ま、その前に小南にはいうことがあるだろ?」

ボスに背中を押されて扉の近くまで歩く。

扉が開いて小南と目があつた。

「おかえり小南。寂しかつた」

第18話

「——実は言つてなかつたんだけど……この三人、俺の弟と妹なんだ」「えッ、そうなの？」

遊真達の入隊を認めないと言い放つた小南に迅さんは白々しい嘘をついた。小南はすぐに烏丸さんに確認を取ると逆に知らなかつたのかと言う返事が帰つてきた。
純粹な疑問だけど、小南は烏丸さんによくこうしてからかわれているのになんで疑わないんだろう……」

「(～ ～) ハツハーン!」

「確かに言われて見れば似てるかも……ね、ハクとレイジさんは知つてた?」

「うん」

「よく知つてるよ、迅が一人っ子だつて事」

「え、一人……え?ひとりつこ……どゆこと…?」

小南が狼狽えている間にうさみが遊真達に【すぐ騙されちゃう子】と紹介した。修と千佳はなんとも言えない顔をしている中、迅さんがまさか信じるとはと笑い飛ばした。
続けてうさみは烏丸さんを【モサモサした男前】、レイジさんを【暴れる筋肉】と紹介

した。

「どうもモサモサした男前です」

「……暴れては、無い：」

「――三週間後まで新人3人を鍛えようと思う。正式にはレイジさん達4人に師匠になつて貰つてマンツーマンで指導してもらうち」「はあ？！ちょっと私はまだこの子達の入隊を認「小南、これはボスの命令でもある」：ボスの？」

迅さんが言うとレイジさんと烏丸さんもボスの命令ならと承諾した。小南も不服そ
うだけど納得はした。

その代わりにと小南は遊真をこの中で一番強そ
うだからと引き抜いた。

「私弱い奴嫌いなの」

「ほほう？お目が高い」

『弱い奴は嫌いなの』

小南が言つた瞬間に胸の中身を掴まれたような感覚がした。

……ボクも、もつと、強くならないと：嫌われたく、無い

「じゃあ千佳ちゃんはレイジさんで、修君は烏丸さんで」

「あ、あのすいません、僕今白堊さんに特訓つけて貰つてるんですけど…」

修がおずおずと手をあげながら言うと皆の視線が一気に集まつた。レイジさんは目を大きくあけて、烏丸さんは「お前、マジか?」という顔をしている。

そんなに、驚く事かな?

「普ツフ…は、ハクには三人全員をやつて貰う。レイジさん達が任務でいないときを主にな。うし!じゃあ三人とも師匠の指導を良く聞いて三週間しつかり腕を磨くよう

に!」

「励めよ」

よーたらうが腹をぽりぽりとかきながら言うと部屋にいた全員の視線が集まつた。

うさみが迅さんはコーチをやらないのかと聞くと俺はやることがあるからと断つた。

早速訓練することになつて、迅さん以外の全員で訓練室へ移動した。
レイジさんと話し合つた結果今回ボクは三人を短い時間で回る、ということになつ

た。

最初は防衛任務が被つてしまつたレイジさんと千佳だ。

スナイパーということもあつて初めは簡単なことしかしない。的に当てる。これだけだ。

姿勢と構えかたを教えて試しに撃たせてみると中央からは外れてはいるけれど的にはしつかりと弾痕が残つていた。

「よし的には当たつてるな。ボーダーの狙撃用トリガーは良くできてる。ちゃんと狙えばちゃんと当たる」

「ちゃんと狙えば、ちゃんと当たる」

「そうだ。悪いが俺は防衛任務が入つて。トリオンが無くなれば弾が出なくなるからそれまで練習だ。細かいところはハクに聞け。じや、後は頼んだぞハク」

レイジさんはボクの頭をポンと叩いて訓練室から出ていった。
レイジさんに言われた通りに姿勢や構え方の細かいところを直して、後は千佳の質問に答えたりした。

千佳は集中して一度言つたことはすぐに覚えてくれた。場所はどうであれ、的からは一発も外さなくなつた。

「時間だ。弾が尽きたら終了だから。がんばつて」

「はい、ありがとうございました！」

「あ、おかえりハクちゃん、千佳ちゃんどうだつた？」

「集中力があるし、覚えが早い。初日でこれなら三週間もあれば動く的にも外さなくなると思う……けど」

「けど？」

「……いや、なんでもない」

「？そつか、あ、見て見て小南と遊真君なんだけど——」

千佳に頭か胸の部分を優先的に狙うように言つたときの、あの目・傷つけるの怖がつていた。：：：馴れていなから、ならまだ良い。あの子みたいに、本当に撃てないのなら……ちがう、あの子と千佳は、違う。

結局、遊真は小南に全て任せることにした。今のところは小南が遊真に勝っているけれど、遊真の戦闘スキルはなかなかで小南が遊真との戦闘を楽しんでいる所もあつた。小南が楽しんでいるのを邪魔はしたくないからね。

体力を使い果たして動けなくなつた修を引きずりながら訓練室から出てソファードの上に下ろすとさみが水を渡してくれた。

「受け流しと射撃はまあまあだが……付け焼き刃つて感じだな。本当にB級か？」

「おつかれ、ほい水分水分」

「ゼエ…ハア…あ、ありがとうございます…」

修が水を受け取ろうとすると小南達が入つていた訓練室の扉が開いて小南が出てきた。

「小南、おつかれ…小南？」

「まさか…ありえない…わたしが…？」

小南の表情が気になつて近寄ると酷く同様していた。

遅れて出てきた遊真に目を向けると頭をボサボサしながらピースをしていた。

「勝った?ま」

「ま、負けてないわよ！分けよ！相討ちでしようが!!」

「いやや！俺のほうが早かつたもんね」

「私よ！」

二人が言い合っている間にうさみに訓練室のログを見せて貰うと最後の1試合で小南と遊真がほぼ同時に戦闘不能になつていた。更に詳しく見ると遊真ほうがが僅かに早く小南を戦闘不能にしていた。

「遊真のほうが早かつたみたいだね」

「ほら、ハクちゃんんだつてこう言つてるぞ」

「は、ハクまでッ：」

余程遊真に負けたのがショックだつたようですがつくりと肩を落とした。遊真がもう終わりかと聞くとリベンジだと言わんばかりに遊真を掴んで訓練室に入ろうとすると遊真と目が合つた。

「あ、そうだ。ねえ小南センパイ俺ハクちゃんともやつてみたい」

「ボクと？」

「やめときなさい遊真。私に勝てないならハクとやつても無駄よ。私、まだハクに勝ち越したことないんだから」

「ほう？」

小南前に比べてすごく、強くなつた。ボクの動きに慣れてきたからというのもあるだろうけれど、スピードも上がつた。

「なるほど、ハクちゃんに挑戦したければ小南センパイを倒してからということか。動きには慣れてきたからすぐだな」

「なッ、調子に乗んないでよねゆーま！ 私に勝とうなんて1000年は早いんだから！ ほら！ 次行くわよ！」

「ほいほい」

そういつて二人は訓練室に入つていつた。

それを見た修がやる気になつたみたいで、たまに千佳の様子を見に行きながら修と訓練を続けた。

「…修は素の体での訓練が必要だと思う」

「…ですね：俺がメニュー組んでおきます」

「す、すいま…せん…」

目の前でぐつたりとしている修を前にして烏丸さんとそんな話をしていた。流石に体力が無い状態でやる訓練なんて物は意味がないから修の今日の訓練は終わりにした。修を運ぶのは烏丸さんに任せて千佳の所へ行くと弾痕が残つた大量の的に撃ち続け

てゐる千佳の姿があつた。

視界が歪んで、今と記憶が重なりあい、ノイズが走った。もう、やだよ…助けて…

「……ちがう……ツ！ なんで、いまさら…」

また、あの子と重なつた。

ヒトを傷つけたくないあの子と千佳、
天然の恵まれたトリオン量、

ボクが、わたしがすてた、あの

「おい！ハク！」

「ツあ、れ、いじさん」

肩を掴まれて意識を現実へと引き戻すと、レイジさんが心配そうに見ていた。千佳は

ボク達に気づいていないのか未だに撃ち続けていた。

「疲れたんだろ、後は俺が見ておくから先に休め」

「……うん、そう……する」

レイジさんの言う通りに任せて訓練室を出る。

「ん? ハクちや

!?

1

「ん? ハクちや

レイジさんの言う通りに任せて訓練室を出る。

「……うん、そう……する」

「疲れたんだろ、後は俺が見ておくから先に休め」

肩を掴まれて意識を現実へと引き戻すと、レイジさんが心配そうに見ていた。千佳は

千佳は

！」

第19話

「——身体に異常はありません。脳波も安定してきていますので数時間もすれば起きると思います」

ボーダー専属の医者にそう伝えられ、小南を除いた玉狹のメンバーは安堵の息を漏らす。

小南は白堊の側にいたいと病室で眠っている白堊と共にいる。

「ですが、念のため明日、改めて精密検査をした方が良いと思います」

「はい、白堊を、宜しくお願ひします。瓦灯先生」

玉狹の面々はそれぞれお礼を言い、小南にも伝えるために部屋を出ていくが、林道はもうすこし話をすると言つて残つた。

「そんで……詳しい所はどうなんだ、里津」

林道は先程までの敬語を外して話しかける。

瓦灯はため息を吐きながら向き直りメガネを外した。

「どうもこうも、白堊さんの体は未だに謎だらけだ。身長も体重も退院前と一切変

わっていない」

林道は渡された白堊のカルテに目を通すと眉を寄せた。

瓦灯の言つた通り身長も体重も、小数点以下の数字まで以前と変わつていなかつた。「食事も生活リズムも改善されたというのにここまで変わつていないとなると、ネイバーの技術によるものだろうね。――反吐がでるよ。本当に」

苛立つた様子で更に里津は林道にカルテとは違う資料を押し付けられ、目を通した林道は青筋を浮かべた。

「正直こんなことは言いたくないけど……あの子の体はもう、人間の枠から、外されてる」

「…………だから、なんだつてんだよ。あいつは、ハクは人間だ」

「そんなことはわかりきつているよ…………この話はこのくらいにしておいて、ここからが本題だ」

瓦灯は白堊の日常生活について林道から聞き出し始める。

最初こそ林道は不思議に思いながら受け答えをしていたが話をするにつれて迅や宇佐美に送られてきた写真まで見せながら語つていた。

一方で瓦灯は話を聞くにつれて何か考え込むような表情になつた。

「…………林道、白堊さんを一人にするなよ。絶対にな」

「お？ど、どうしたんだよ急に…」

「私の憶測からの結論だが、白堊さんは感情を理解し始めたせいで倒れた可能性が高い」

「どういう、ことだよ、それ」

「…………直球で言うぞ、他人を思いやれる奴が人を殺して平気思うか？——そんなんわけないだろ、確実にトラウマになる。がらんどうだつた時は平氣だらうが、今は……」

『ねえ君、大丈夫？どこから来たの？』

『…………』

『うーん…………まあいつか！ととりあえずボクの家に来なよ』
ずっと、ずっとずっと不思議だつた。

『何で、こんなに傷だらけなの？…うん、いいの、言わなくていいから』
『なんで泣いてるんだろうって、』
『なんでお前が顔を歪めるんだろうって』

『だいツじよう、ぶ、わかってるから…』
『なんで、ボクを憎まなかつたんだろうって』

命令内容を首輪を通して直接脳内に伝えられ、待機する。
命令内容は

〔テキコクフキンノシユウラクヲカイメツサセヨ〕
〔テキコクシユウゲキコウサクガカンリヨウシダイサクセンヲジツコウ〕
〔コウサクカンリヨウマデセンブクシタイキ〕

わたしはご主人様に
指揮官

「お前は行き場を失った戦争孤児でも演じてろ」と命令されて、ご主人様にそれらしくされる。命からがら逃亡してきたように服はぼろぼろに敵に襲われたように裂傷、銃跡を作つて貰つて女らしく犯されて行き倒れのように目標ポイントに捨て置かれる

『ねえ君、大丈夫？どこから来たの？』

20話

「ううん……」

「…………」

倒れていた白堊を連れ帰った少女は連れてきたは良いものの、何も話さない白堊の扱いに困っていた。

そして改めて白堊を見直すと、服はボロボロで土埃で汚れていた。

——よし、まずは綺麗にしないとね！

少女は善は急げと言わんばかりにバタバタと走り去つて自身の服を一式持つてくると白堊に軽く声をかけてから手を引いて風呂場へと向かつた。

「どりあえずお風呂入ろうね。はい、ばんざーい……」

白堊の服が脱がされ、露になつた体を見て少女は目を見開く。

火傷や裂傷、更にはまだ塞がつていな生々しい傷跡もあつた。

「なに……これ……」

徐々に意識が覚醒していく。

身体に伝わってくる感覚を察するにベッドの上だと言うことがわかつた。

何故いるのか目を閉じたまま思い出そうとすると、ズキッと痛んだ。

「うツ…………うこな、み？」

誰かに頭を撫でられて目を開けると、小南は目を合わせた途端に寝たままのボクに抱きついて良かつたと小声で言つた。

「……おはよ、具合はどう？」

「平常だよ。それより——いつ帰つてきたの？」

「ツ！：け、今朝帰つてきたの！」

「…? そつか、お帰り」

体を震わせてどもる小南を不思議に思いながらも納得する。小南が起き上がるのにあわせてボクも起きて回りを見てみると小南の部屋でもボクの部屋でもなかつた。

「…? は……病室?」

「お、起きたのか」

「あ、レイジさん」

レイジさんに続いて烏丸さん、うさみが入つて来て抱きついてきた。

「わ、うさみ?」

「よかつたああ~?」

「?え、ええと……」

訳もわからずにレイジさん達を見るけど、レイジさんも烏丸さんも何故か安心したような表情をしているだけだつた。

「え、と……何でボクは病院に…?」

「え、と……よく、覚えてなくて…? めんなさい」

瓦灯先生の話を聞いてみれば【過換気症候群】、所謂過呼吸でボクは意識を失つたらしい。

「無理はしなくて良いさ、記憶が無くなるのは不安だろうが『それは、大丈夫です』……何?」

瓦灯先生の言葉を不定すると怪訝そうに眉を曲げた。

言葉を遮るのは良くなかったな、と反省しながら言葉を続ける。

「記憶が無くなるのは、前からよくあることなので特別何かを感じる訳では無いです。口を挟んでごめんなさい」

ペコリ、と頭を下げるとい瞬りンドウの声が聞こえた気がしたけど、瓦灯先生が話しが始めた。

「どうか、まあとりあえず今日はもう帰つて良いぞ。たが明日の…………10時頃にまた来てくれ。深刻な事がないか一応精密検査をしたいからな」

そう言いながらほら、と印刷された診察券をボクに寄越すと後ろに居た皆が退出し始めたのに続いてボクも部屋を後にした。

リンドウが運転する車の中で皆から今日あつた出来事を教えて貰つた。

まず、修と遊真、千佳が玉狹所属のボーダー隊員になつて、修は烏丸さんに、遊真是小南で千佳がレイジさんの弟子になつた。

ボクは全員の細かいところの指導をする、と言うことになつたらしい。

「まあ今日あつたのはこんくらいだなッと、ほらちやつちやと降りろ」

玉狹に入つてリビングへ行くと修と遊真がレプリカを囲んでいた。

「お帰りハクちゃん。大丈夫だつたの？」

「お、お帰り……なさい、です」

「ただいま、うん。特に異常は無かつたけど明日精密検査をするから本部に行くことになつたよ」

「そつか、じやあ俺たちもう帰るからさ、またね」

「え、ちょツ！空閑！」

遊真は修を引っ張つて帰つていつた。その後をすこし遅れてレプリカが追いかけて、部屋をでる時にボクにしつかり休むようにいつてから出ていつた。

その日は皆でご飯を食べて小南達とお風呂に一緒に入つて早めに寝た。

にじゅういちわ

「……あれ、なんだこれ…？」

白堊さんが倒れて運ばれていつた後に床に落ちて、微かに光っている小さな箱を見つけた。

手に取つてみればそれは親指の先位の大きさでまるでトリオンキューブみたいだつた。

更によく見れば中心には黒い靄みたいなのがうねつているように見えた。

「ん？ 修、なんでトリオンキューブもつてんだ？」

「空閑…さつきそこで拾つて、やつぱりトリオンでできるのか」

空閑は僕の手からキューブを取つてしばらく観察すると唐突に右目でキューブを覗き込んだ。

「空閑？」

「…………違う、これトリオンキューブじゃない」

「え？」

空閑はさつき言つたことを否定して、キュークをテーブルの上に置いた。

「違うって……ならなんなんだ？」

「トリオンレコードだよ。えと、地球だと……」

「レコード……？」

「地球ではUSBメモリー、と呼ばれている物とほぼ同じだ」

レプリカがそう言うと空閑は指を鳴らしてそれだ！と指を指した。

「地球には無いものだと思っていたのだが？ 修、これをどこで？」

「さつきそこで拾つたんだ。僕も初めて見た」

「ふむ……」

レプリカが暫く考え込んでから口からコードを伸ばしてトリオンレコードに接続して動かなくなつた。

「レプリカ？」

「ほつといて良いぞ。いまレコードの中身を見てるから暫くはこのままだ」

空閑はよつこいしょ、とソファーにゴロンと横になつて目をつむつた。

それにつられて僕も椅子に座つて動かないレプリカをぼんやりと見つめた。

『かツ……ひツツツツツぎゅツ……!!』

ふと、白堊さんのあの表情が脳裏によみがえる。

「…………大丈夫…………だよな……」

千佳の使つてる訓練室から出てきた白堊さんは突然過呼吸を起こして倒れた。雪みたいに白かつた肌は青白くなつて

手足をビクビクと痙攣させて

あんなに苦しそうに、辛そうにしてたのに

僕は：

「…………何も、出来なかつた…………」

突然のことで呆然とし過ぎて……いや、これは言い訳にしかならない。言つてたじやないか、前に大怪我をして、ずっと病院にいたつて言つてたじやないか。

宇佐美さんも鳥丸さんも、迅さんも玉狹にいる人全員が白堊さんを気遣つていたのに

僕は「修」

「それはお前が気にすることじゃないぞ」

寝ていた筈の空閑が急に、まるで心を読んだように話しかけてきた。

「…………いや、でも僕が白堊さんに「無理をさせたからこんなことになつた、ツてか？」
…………そうだ」

「あのさ修、もしそうだつたとしてもそれは修の責任じゃないと俺は思うぞ？」
空閑はなんでそんなに気に病むんだと、本当に不思議そうに言いはなつた。

「疲れとか負荷が貯まつててこうなつたなら、それはハクちゃんとそれまで回りにいた人たちの責任だろ？」

ハクちゃんは自己管理が出来てなかつた。

ハクちゃんが無理をしてるの気づけなかつたし、止められなかつた。
な？どこにも修が悪かつた所なんてないぞ？」

だから気にするな、と空閑に肩を叩かれる。

言われてみれば確かに…納得ができる……ような気がするけど、やっぱり僕の心は晴れないままレプリカが起動するのを待つた。

「解析、完了した」

「お、お疲れレプリカ、中身なんだつた？」

再起動したレプリカに空閑が興味津々といった様子で話しかける。けど、レプリカは何も言わずに動かないでいる。

「レプリカ？」

「あ、ああ…中身は…」

レプリカは何故か僕を見て何かを考えているのかまた動かなくなつた。
それをみかねた空閑はレプリカの体のあちこちをツンツンとつついている。

「あ、ええと…？」

「おゝいレプリカ～？どうしたんだ～？」

「…………すまないが、修は暫く席を外して欲しい」

「え？」

レプリカは心なしか強張つた声色でそう言つた。

何故？という感想が第一に湧いてきた。

何でそう言われたのか、僕には聞いてほしくないことがレコードに入つていたのか？

「レプリカ、修が困つてるぞ？」

「…………すまないが、これは修には刺激が強すぎる。仲間外れにしてやろうという魂
胆は全く無い」

「ああ、うん。わかつたよ」

レプリカは本当に申し訳なさそうにいうものだから、本当に惡意は無いんだろう。そ
う思つていわれた通り僕は席を外した。

とは言え、僕としても気になることはある。

「……すこしだけ…ちょっと聞くだけにしよう」

魔が差す、という言葉が今の僕には相応しいんだろうな、なんて思いながら僕は扉を少しだけ開けて、耳を近づける。すると、思っていたよりもはつきりとレプリカと空閑の会話と何か別の音も聞こえてきていた。

「…………この国旗、ラウドのだよな」

「うむ、それは間違いない。まさかとは思っていたが…これにも関わっていたとは…」「生きる為とはいえ…まあ、イクセルだからなあ…『死ねツ!!』……」

「ツ!?

突然、知らない声が部屋に響いて声を出しそうになつたけど、何とか押さえた。そし

て

『お前が！何でツツツ!!何でこんなことすんだよツ!!』

『何とか言えツガアツ!!』

ドチャツと、重い水気の含んだ物が落ちたような鈍い音がして、気になつて扉の隙間にから覗き込むとそこには

『すべてのしようがいぶつのはいじょをかんりよう』

『おせえんだよグズが、貯まつてつからさつさと來い』

『はい、ごしゅじんさま』

いる筈のない白堊さんがいて

「…………は…………？」

白い身体のあちこちを赤く染めていて、

「修、席を外すように言つた筈だ」

首から血を垂らす、男の首だけを持つていた

にじゅうにわ

「はつはツ……ングツ！はつはつはつはつ！」

「…………ペース、速くなってる。焦らなくて良い、から一定に」

ボクがそう言うと修ははひツ！と呼吸が混ざったような、少し変な返事をした。

ボクが倒れて病院に行つてから今日で一週間がたつた。

病院での精密検査の結果は【不明】、至つて健康体だつた。でも少しでも変なところがあればすぐに連絡をするようにと瓦灯先生にその場で連絡先を交換させられた。

今日は【玉狹第二】のメンバー全員で体力作り、をしている。今はとにかく走つて体力を付ける。

前方を見れば少し遠くに千佳やレイジさん達が見える。

はつきり言つて、修には全部が足りない。

体力、持久力、筋力、肺機能、トリオン量。

トリオン量はボクたちみたいにしか後付けでしか増やせないみたいだけど、体の機能は使い続けることで増幅されるから、これから頑張つていくしかない。

「はつはつはつはつハツ！」

「……」

隣を走る修の体勢がガクンと一瞬崩れてペースが落ちる。

横目で身体全体を確認するとさつきまで辛うじて保てていた重心がぐらぐらと揺れて、足を気にしているように見えた。

……足、痛めたかな？

「はツ！ふつはツはツはツはツはツ！」

修はさつきよりも更に呼吸を乱しながら走る。

でも、さつきよりも苦しそうにしていて、走る場所もふらふらとしてきた。やつぱり、どこか痛めたみたいだね。終わりにしよう。

「はつはつはつ？は、はくツ　あさん？」

修の前を遮るように腕を出して徐々にスピードを落としていつて、修は止まつた。

修は膝に手をついて肩で息をして整えようとしている。でも、走り続けた後に急に止まつたりするのは良くない。少し歩きながら整えるのが一番良い。

「歩いて終わりにしよう。足、痛めてるかもしれない」

そう言つて修の足に注意しながら手を引いてゆつくりと玉狛に向かつて引き返す。

「ぼツ、ま、まだ」

「無理をしても、身体はついていかないよ。ゆっくり…………とはいかないけれど、休め

るなら休もう?」

「あ……は、はい……そう、します……」

「うん。じゃあ帰ろう」

「うん。ちょっと痛めてるねえ……明日まで湿布を貼って、そんでとりあえず今日の残りの時間はトリオン体での訓練にしよう」

「す、すいません……」

「別にいいよお？修君も本気でやつてるつてことだし♪…………メガネ人口を増やす

ための重要な人物なのだから♪」

「あ、あはは……」

宇佐美さんはメガネをスチャツと直してドヤ顔をしてきた。

毎度思うけどメガネ人口とは……？いやまあメガネをしている人の多さだらうけど。とりあえず、残りの時間を無駄にしないためにトリオン体へと換装する。けど……

「…………」

「あ、あの栢さん…白堊さんが……」

「ん～？あ、まあた寝ちゃつたかあ…もつしも～しハツクちや～ん」

ソファに座つたまま眠つていた白堊さんに宇佐美さんが起こしにかかる。

栢さんは白堊さんに近づいて……白堊さんをまるで犬か猫のようにむにむにとし始めた。

次第に揉むだけではなくほつペを摘まんだり押し潰したりして、白堊さんの顔で遊び始める。

「あ、あのツ……う、うさみ、さんツ」

「ん～？」

僕は笑わないように堪えているとニヤニヤする宇佐美さんと目があつた。

「……えい♪」

「ふはッ！？」

瞬間、宇佐美さんは白堊さんの顔をまるで梅干しのように潰した。それに僕は耐えき

れず吹き出して崩れ落ちそうになるが、ギリギリで耐えた。

「ん……うひゅみ？」

「およ、起きちゃつたか。おはよ」

「……また寝ちゃつて、ごめん…」

白堊さんはそう言つて視線を落とす。

実を言うとあの日から白堊さんはふとした瞬間に寝てしまう事が多くなつた。訓練の休憩時間や待ち時間。宇佐美さんや小南先輩によればテレビを見ている時、お風呂に浸かっている時にもらしい。

「すこしだけだから大丈夫だよ、ね？さ、修君もやる気マンマンみたいだしはやくやろ～！」

お～！と白堊さんを励ますように背中を撫でる宇佐美さん。

「はい！よろしくお願ひします白堊さん」

「ん…、わかった。いこ」

そして、白堊さんはソファから降りると僕の手を引いて訓練室へと向かっていく。

「うさみ、設定よろしく」

「は～い、おまかせあれ♪」

「は〜いお疲れ様〜」

ヘトヘトになつた僕は白聖さんに引きずられるように訓練室から連れ出されてソファへと寝かされた。

「ほいほいつと、水分と糖分だよ〜」

寝かされ、天井を見上げながら息を整えていると宇佐美さんが隣に水と…どら焼きを置いてくれた。

前から思つていたけど、玉狹つていつもどら焼きがあるような…

「あ、ありがとうございます…」

「うさみ、ありがとう…………んぐ…」

ポスツ、と軽い衝撃と一緒に視界に白い髪が入り込む。

どうやら白聖さんがソファに座つたみたいだ。

「…………はむ…………ン」

息を整え終えて体を起こして、どら焼きを食べながら隣を見ると白聖さんが背筋を伸ばしてどら焼きを啄むように食べていた。

時折、白聖さんの足がピクッと揺れる。

前に鳥丸さんが

「甘いものとかうまいのを食べると揺れる。食べかる前に4回揺れるとＳＲだ」とか言つていた。今回は2回だつた。

「修」

「ツは、はい！、？」

声をかけられ驚いて白堊さんを見るとジツと目を合わせられて僕に手を伸ばしていた。

「い、いや……すいませ……え？」

「修が見てて、思い出した。こうすると疲れが取れやすくなるって」

いつの間にか僕の視界は横になつていて、頭には柔らかい感触が伝わり続けていた。
……??

「え、あ～…、？」

「今日はもう終わりだから、修が回復するまでこうしてる」

そして頭にもうひとつ暖かい感触が増える。

「お～……これまた、大胆な……因みにハクちゃん。どこから知つたの？」

「？——記事に書いてあつた。鳥丸さんと迅さんもそうだつて言つてた。もしかして、間違い？」

「いや正解なんだけど…………そつかあゝ烏丸君と迅さんかあ……まいつか。後で私にも膝枕してね」

「うん。わかつた。修寝ちやつたみたいだから、そのあとで」